一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

鳥取県日野郡江府町

川平鉄山跡
かわひらてつざんあと

２０１６
一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書9

川平鉄山跡

二〇一六　一般財団法人　米子市文化財団

一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

鳥取県日野郡江府町

川平鉄山跡
（かわひらてつざんあと）

２０１６
一般財団法人　米子市文化財団

川平鉄山跡遠望

調査地遠景

石組１（半裁状況・被熱赤化）

石組２（半裁状況・被熱赤化）

は　じ　め　に

中国山地を日本海へと貫流する日野川の上流部に位置する鳥取県日野郡は、江戸時代から明治にかけて盛んに「たたら製鉄」が行われた地域です。

「たたら製鉄」は古代から明治中期まで行われた日本の伝統的な鉄生産法で、日野郡内では中国山地の花崗岩地帯に含まれる砂鉄を原料として「たたら製鉄」が盛んに行われ、数多くの製鉄遺跡が残されています。

近年、これらの「たたら製鉄」遺跡は、この地域の特色ある歴史・産業遺産として注目され、地域活性化の資産として、活用が図られているところです。

今回調査した川平鉄山跡は、日野郡内でも有力な鉄山師、根雨の近藤家が経営していた鉄山の一つで、安価な洋鉄の進出に圧倒される中で、明治24～34年にかけて操業され、銑、鋼、鋼が生産されていた鉄山でした。

砂防工事中ではありましたが、このたびの発掘調査によって失われる川平鉄山跡遺構の一部の記録を残すことが出来ました。これも発掘調査の実施にあたり、鳥取県西部総合事務所日野振興センターをはじめとする関係各位の多大なご協力のおかげであり、ここに記して感謝申しあげます。

平成２８年３月

一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　　杉　原　弘一郎

例　　言

１．本報告書は川平山谷川小規模砂防工事に伴い実施した川平鉄山跡の発掘調査報告書である。
２．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団埋蔵文化財調査室が実施した。
３．本報告書に掲載した地図は、江府町作成の１／5,000「江府町全図」を加筆して使用した。また、鉄山跡地形図は日野県土整備局作成の1/500「砂防工事図」を補測して加筆して使用した。
４．本発掘調査にあたり、遺構・遺物について島根県埋蔵文化財センターの角田徳幸氏に指導をいただいた。記して感謝申し上げます。
５．本発掘調査にあたり、石垣の写真測量を測量業者に委託して実施した。
６．本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
７．４章は「たたら研究会」の池本美緒氏に原稿を寄稿いただいた。記して感謝申し上げます。
８．本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当職員が撮影したものである。
９．本報告書の執筆と編集は小原が行った。
10．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類は米子市教育委員会（米子市埋蔵文化財センター）、出土遺物は江府町教育委員会で保管している。
11．発掘調査にあたっては、地権者の岡本隆雄氏、江府町教育委員会松原俊二氏に多大なご支援、ご協力いただいた。記して感謝いたします。

凡　　例

１．遺跡の略称は「ＫＨＴＺ」とした。
２．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
３．本報告書における方位は磁北を示し、レベルは海抜標高を示す。
４．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値を示す。

目　　次

巻頭カラー
はじめに
例　言・凡　例

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査体制 …… 2
第２章　位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　川平鉄山跡の概要 …… 7
　第２節　調査の方法 …… 8
　第３節　検出された遺構 …… 11
　　１　砂鉄洗い場上段平場 …… 11
　　２　砂鉄洗い場平場 …… 14
　第４節　検出された遺物 …… 22
　　１　陶磁器　　２　金属品　３　羽口
　　４　炉壁・鉄滓　５　砂鉄・木炭 …… 22
第４章　近藤家文書からみた川平鉄山 …… 26
　　１　操業期間と場所 …… 26
　　２　操業状況 …… 28
　　３　大炭・小炭 …… 29
　　４　砂鉄 …… 30
　　翻刻史料 …… 32
第５章　総　括 …… 34
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 5
第２図　江府町の遺跡分布図 …… 5
第３図　川平鉄山跡地形図 …… 9
第４図　調査区遺構配置図 …… 10
第５図　石組１平面・立面図 …… 11
第６図　石組２平面・立面図 …… 12
第７図　小屋基礎石列平面・立面図 …… 13
第８図　石列１平面・立面図 …… 13
第９図　トレンチ１土層断面図 …… 15
第10図　上段平場石垣・川側石垣土塁
　　立面図 …… 15
第11図　石列３平面・立面図 …… 15
第12図　石列２平面・立面図 …… 17
第13図　石積土手平面・断面図 …… 17
第14図　トレンチ５土層断面図 …… 17
第15図　トレンチ６土層断面図 …… 17
第16図　川側石垣立面図 …… 19～20
第17図　トレンチ２平面・土層断面図 …… 21
第18図　トレンチ３平面・土層断面図 …… 21
第19図　トレンチ４平面・土層断面図 …… 21
第20図　出土遺物図(1) …… 23
第21図　出土遺物図(2) …… 24
図　　川平鉄山製鉱所図面 …… 27

挿表目次

第１表　江府町内たたら遺跡一覧 …… 6
第２表　陶磁器観察表 …… 25
第３表　金属製品観察表 …… 25
第４表　羽口観察表 …… 25
第５表　鉄滓・炉壁観察表 …… 25
表１　鑪操業吹代数 …… 28
表２　鑪生産物と製品一覧 …… 29
表３　川平鉄山へ供給された大炭 …… 30

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成26年10月12日、「日野町歴史研修会」関係者が「川平たたら」を探訪した際に、現地で砂防工事が行われているのを発見した。そのため「川平たたら」の一部が工事によって破壊される恐れがあるとの心配から、江府町教育委員会へ、その旨を連絡された。

「川平たたら」は、鳥取県生産遺跡分布調査報告書（1984）に報告された周知の遺跡であったが、登録ミスのために事前協議がなされていなかったようである。

連絡を受けた江府町教育委員会は、緊急に施行者の鳥取県日野振興センター日野県土整備局と鳥取県教育委員会文化財課を交えて遺跡保護と工事との調整協議を行い、その結果、事前の調査実施が必要との結論へ至った。しかし鳥取県教育委員会文化財課、江府町教育委員会とも緊急調査の対応が困難であったため、10月17日に江府町教育委員会から米子市教育委員会へ調査協力要請があった。

これを受け米子市教育委員会から米子市文化財団へ緊急調査対応が可能かどうかの協議があり、米子市文化財団として受託可能である旨回答した。

10月22日、日野県土整備局砂防課、鳥取県教育委員会文化財課、江府町、江府町教育委員会、米子市教育委員会、米子市文化財団の６者で緊急調査に向け実施協議を行った結果、日野県土整備局の委託を受けて、10月28日から米子市文化財団埋蔵文化財調査室が緊急に発掘調査を実施することとなった。

遺跡名称は「川平たたら」を発掘調査届では遺跡名「川平鉄山跡」と届出したため、報告ではこの名称を使った。

第２節　調査の経過

調査は、「川平鉄山跡」の工事対象地387㎡を対象に、平成26年10月28日から11月30日までの間に現地の発掘調査を行った。その後、平成27年６月１日から平成28年３月31日までの間に整理作業と報告書作成業務を行った。

発掘調査の対象地は、「川平鉄山跡」の砂鉄洗い場の一部と考えられ、石垣で築かれた平坦地が２段観察されていた。現況は杉と桧の大木の林となっており、調査に先立ち立木の伐採が至急に必要であった。そのため立木伐採と処分を日野森林組合へ委託して、10月28日から11月3日までの間に実施した。調査は11月３日からに５日の間に機材搬入、重機による表土除去、発掘区画設定等の事前準備作業を行い、11月６日から人力による発掘を実施した。

また、砂鉄洗い場の川側の石垣が工事で消滅するため、11月17日に㈱フジテクノへ委託して写真測量を実施した。また、写真測量の実施に当たり、石垣清掃を日野シルバー人材センターへ委託して実施した。調査経過の主な概要は下記のとおりである。

―平成26年度現地調査日誌抄録―

10月28日　日野森林組合が委託した立木伐採作業に着手した。

11月３日　発掘機材を現地へ搬入し、調査準備を行った。

11月４日　重機による表土を除去と、放置されたトタン板等の不燃物撤去を行った。
11月５日　調査区の設定と杭打ち、調査前写真の撮影を行った。
11月６日　人力でＡ１区の発掘に着手し、石組1を確認した。
11月７日　Ａ１区で小屋基礎石列を確認した。また、Ａ２区に着手した。
11月10日　Ａ１区石組１を完掘し、測量・写真撮影を実施した。
11月11日　Ａ３区に着手し石列２を確認。日野シルバー人材センターが石垣清掃に着手。
11月12日　Ａ３区石列２の実測後、石列下部の追究を行った。
11月13日　Ａ２区の石垣検出と実測を行った。
11月14日　Ａ３区～Ａ４区の床面追究。黒色土落込みが造成埋土であることを確認した。
　　Ａ４区の川側土塁下で石列３を確認した。
11月17日　Ａ３区～Ａ４区の川側土塁の石積、石列３の追及 を行う。川側石垣写真測量。
11月19日　Ａ３区に造成地業確認トレンチ３を設定し発掘 した。
11月20日　Ａ２区造成地業確認トレンチ２、Ａ３区造成地業確認トレンチ４を発掘した。
11月21日　Ａ５～７区に積んだ排土を重機で移動し、Ａ５～７区の表土剥ぎを行った。
11月26日　Ａ５区で石積土手を調査。地業トレンチ５、６の発掘に着手した。
11月27日　Ａ５、６区で地業トレンチ５、６の追及、Ａ１区石組２を半栽し実測を行った。
11月28日　トレンチ５、６の実測と写真撮影を行い、撤収作業を行った。

第３節　調査体制

平成26年度（現地発掘調査）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団
　理事長　杉原弘一郎　　常務理事　中村智至（財団事務局長）
　埋蔵文化財調査室
　室長　岡　雄一（米子市教育委員会文化課長）　　事務長　小原貴樹
事業担当　埋蔵文化財調査室
　主任調査員　高橋浩樹　　調査員　小原貴樹（事務長兼務）
　嘱託補助員　秦　美香
協　　力　江府町教育委員会社会教育課　松原俊二
発掘作業員　相見　稔　奥田延寿　加藤喜代枝　佐々木節子　谷本　稔　谷本真知子
　手島容子　西田　哲　　重機操作　松本幸延

平成27年度（整理・報告書作成）

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団
　理　事　長　杉原弘一郎　　常務理事　先灘達也（財団事務局長）
　埋蔵文化財調査室長　小原貴樹　　非常勤職員　田中昌子(事務員)
事業担当　埋蔵文化財調査室
　調査員　小原貴樹（室長兼務）次長兼統括調査員　平木裕子
　嘱託補助員　秦　美香

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取県日野郡江府町は鳥取県西部の日野川上流域にあり、西は伯耆町、南は日野町、北は大山町、琴浦町、倉吉市、東は岡山県真庭市と新庄村の７市町村に接している。

町域は北東側を中国山地の分水嶺に接しているため、日野川へ向かって下る斜面が大方の地形となっており、最高標高地は1,219ｍの毛無山、最低標高地は伯耆町境の114ｍを測る。総面積は124.9㎢で、山林と原野がその９割を占め、耕地はわずかで、耕地や集落は山地の裾野や俣野川、船谷川、小江尾川沿いの河岸段丘や谷底平地に点在している。人口は昭和30年に7,355人であったが、平成28年１月現在3,147人と激減しており、鳥取県内の19市町村中で18番目の人口となっている。

交通は日野川に沿って国道181号線とＪＲ伯備線が通り、江尾、武庫の駅が置かれている。また、米子自動車道が町を東西に貫通し、佐川に江府インターチェンジが設けられ、高速道路とも繋がっている。また、県道で鳥取県中部や岡山県側とも結ばれており、交通の要衝でもある。

川平鉄山跡は、鳥取県西部の日野川上流域の鳥取県日野郡江府町久連字下池田976他に所在する製鉄遺跡で、鳥取県西部を流れる日野川流域に多数存在する製鉄遺跡の一つである。遺跡は、日野川本流へ西から合流する川平山谷川と呼ばれる渓流の谷間の出口一帯に所在している。

第２節　歴史的環境

江府町内での人々の暮らしの痕跡は、佐川第１遺跡や岩屋ケ成遺跡から押型文土器が出土しており縄文時代早期に遡ることが知られている。縄文時代前期から晩期にかけても、助沢竜王遺跡（前期～晩期）、江尾宿遺跡（前期）、美用第１・２遺跡（後期～晩期）の遺跡が知られ、山間地で山の幸を求めて人々が活動していたことを物語っている。

弥生時代になると、袋原第２遺跡で弥生時代中期後半の竪穴建物跡が発見され、稲作文化の波及は海岸部に比べてやや遅れている。後期前半になると江尾宿遺跡、荒田豆ケ原遺跡で当該期の土器片が採集されている。引き続き後期後半から末期には佐川第１遺跡や岩屋ケ成遺跡で集落跡が発見されている。

古墳時代になると、いずれも２～３基の円墳で形成される貝田古墳群、大河原古墳群、池の内古墳群、荒田古墳群、佐川古墳群が造営されており、昭和初期に開拓で消滅した上ノ原古墳群は、15基からなる５世紀末から６世紀の後期群集墳であったことが知られている。古墳の埋葬施設の大半は横穴式石室であり、中でも貝田１号墳は側壁を持ち送りした窿穹状の特異な構造を持つことで注目される古墳である。古墳時代後期から終末期には、北谷ヒナ横穴墓群、杉谷横穴墓、小江尾横穴墓が造営されている。小規模ながら古墳や横穴墓の存在は、日野川上流域の政治的な地域勢力の様子を物語っている。

奈良～平安時代の様子は、よく解っていないが「延喜式」の記載にある「伯耆国日野郡武庫郷」が現在の江府町武庫のあたりに所在していたと考えられている。

中世には、「正平一五年庚午三月二十日」の刻字を持つ助沢の五輪塔が南北朝期の遺構として残っ

ている。

戦国時代には町内に亀山城跡、美女石城跡、宮市城跡、半ノ上の城山などの中世城跡が存在しており、村を治めた土豪の存在が推察されるなかで、日野の国人層、蜂須賀氏が江美城を本拠として一帯を治めている。「陰徳太平記」には戦国大名の尼子氏と毛利氏の覇権争いのなか、尼子氏へ加担して江美城にあった蜂須賀氏が、毛利方の杉原盛重に攻め滅ぼされたと記載されている。

江美城跡は日野川を望む丘陵端を堀切で区画し、郭には土塁を築いている。郭は本丸、西の丸、八幡丸が連なり、やや離れた南北の丘陵に出丸として兎丸と銀杏の段丸を配している。江美城跡は1982年に西の丸、1997年と1998年に本丸の発掘調査が行われ、石垣積みの櫓台や階段、建物基礎縁列石が確認されている。遺物は陶磁器や瓦などの遺物が検出されており、16世紀末から17世紀の時期を示している。中でも金箔装鯱瓦が出土して注目された。

関ヶ原合戦後には、伯耆17万５千石の領主、中村一忠の領地となり、中村家の断絶後には黒坂５万石城主の関一政の領地となった。その後、鳥取池田藩の領地となり、福田氏が自分手政治を行っていた。

江戸時代の日野郡の特産物は鉄であり藩の経済を潤した。「伯耆誌」によると日野郡には170か所の鉄山が散在したと記されている。

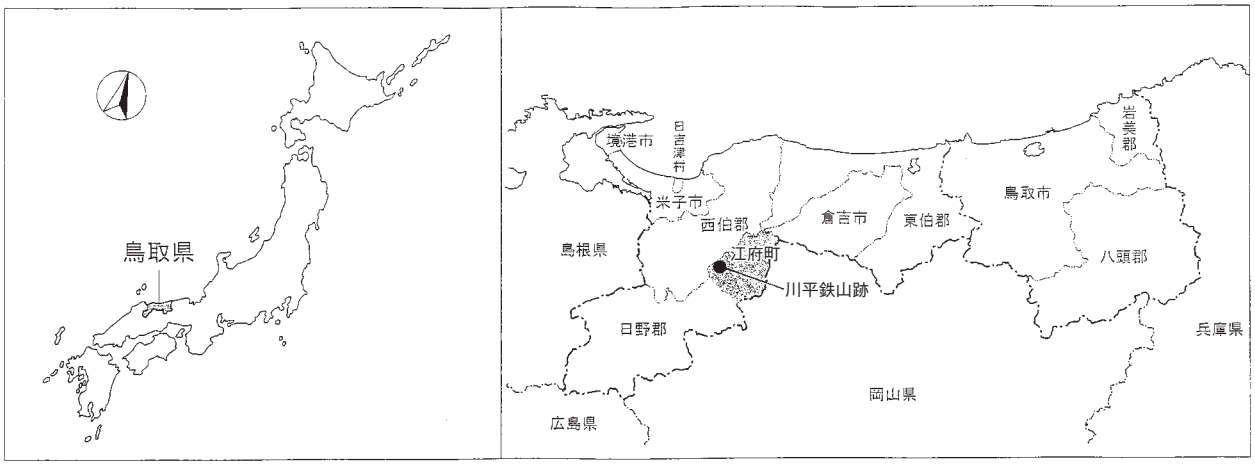
鳥取県生産遺跡調査報告書によると、第１表のとおり江府町町内には37か所のタタラ場や鍛冶場の遺跡が知られており、おもに江戸中期から明治後期にかけて操業されていたと考えられるものである。

日野郡内では製鉄業を経営した多くの鉄山師の中から、近藤・木下・梅林・青砥など大資本の鉄山師が台頭した。中でも根雨の近藤家は明治期まで鉄山経営を行い、『「日野郡史」は、年代は明らかではないが、近藤家の鉄山林の分布と面積、所有形態を揚げている。それによると、近藤家は郡内に61か所の鉄山村を持ち、78か所の製鉄工場を経営していたという。』と江府町史に記載され、近藤家が日野郡内で行っていた鉄山経営の規模を垣間見ることができる。

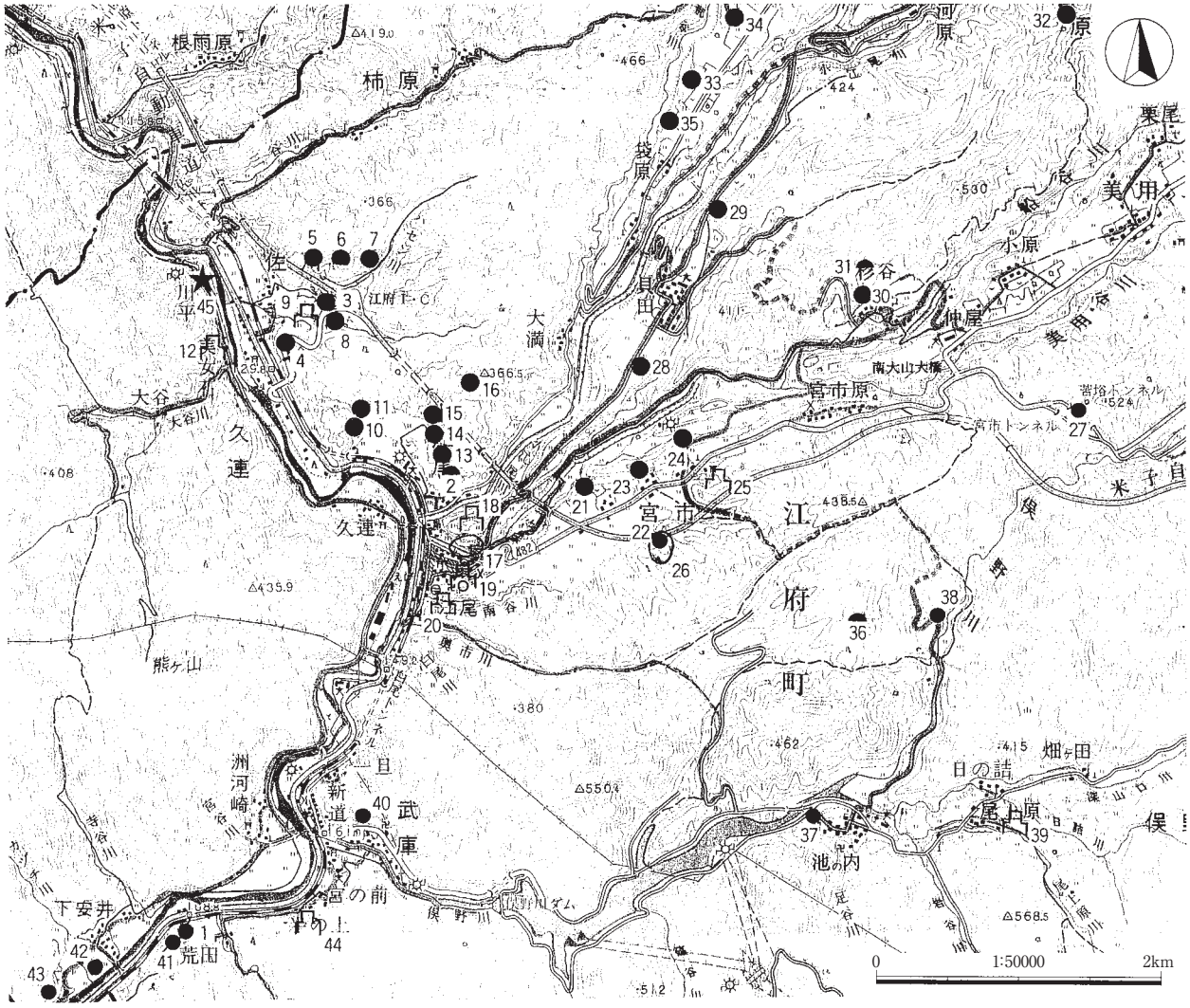
川平鉄山跡は、近藤家が経営した鉄山で明治22～33年にかけて操業され、銑、鋼、鋼が生産されていたようであるが、安価な洋鉄が輸入されるようになり、たたら製鉄は急速に衰えて行った。

参考・引用文献

「日野郡史」1926　日野郡自治協会
「江府町史」1975　江府町史編纂委員会
「江美城址調査概報」1982　江府町教育委員会
「鳥取県生産遺跡調査報告書」1984　鳥取県教育委員会
「北谷ヒナ横穴墓群発掘調査報告書」1990　江府町教育委員会
江府町指定史跡「江美城跡」1998　江府町教育委員会
「小江尾横穴墓群発掘調査報告書」2000　江府町教育委員会
「荒田豆ケ原遺跡発掘調査報告書」2002　江府町教育委員会
「近藤家文書による鉄山」伯耆文化研究７　2005　景山　猛



第１図　遺跡位置図



1	荒田豆ヶ原遺跡	2	小江尾横穴墓群	3	佐川第１遺跡	4	佐川第２遺跡	5	岩屋ヶ成遺跡
6	佐川１・２号墳	7	佐川３号墳	8	佐川５・６号墳	9	亀山城跡	10	佐川第３遺跡
11	谷山日南遺跡	12	美女石城跡	13	小江尾第１遺跡	14	小江尾第２遺跡	15	小江尾第３遺跡
16	小江尾第４遺跡	17	江尾宿遺跡	18	江美城銀杏段丸跡	19	江美城本丸跡	20	江美城字佐木丸跡
21	宮市経塚	22	宮市１号墳	23	宮市２号墳	24	石斧出土地	25	宮市城跡
26	山神脇遺跡	27	苦塔遺跡	28	貝田３・４号墳	29	貝田１・２号墳	30	杉谷古墳
31	杉谷横穴墓群	32	大河原古墳群	33	袋原第１遺跡	34	袋原第２遺跡	35	袋原第３遺跡
36	北谷ヒナ横穴墓群	37	池の内古墳群	38	塚原古墳	39	尾上原城跡	40	武庫１号墳
41	荒田古墳群	42	宮の前遺跡	43	下安井神社古墳	44	半ノ上の城山	45	川平鉄山跡

第２図　江府町の遺跡分布図

第1表　江府町内のたたら遺跡一覧（「鳥取県生産遺跡調査報告書」1984 から引用一覧化したもの）

	遺　跡　名	所　在　地	備　　考
1	猿坊たたら	柿原猿坊	江戸後期、俣野の鉄山師が経営か
2	猪ノ牧たたら	吉原猪ノ牧	野だたら、製錬滓散布
3	西谷たたら	貝田西谷	野だたらか、製錬滓散布
4	下鍛冶屋平たたら	大河原下鍛冶屋	伝承なし、護岸工事で地形変化
5	鍛冶屋平たたら	大河原下鍛冶屋	寛政３年「金屋子神社奉加帳」に熊山鍛冶屋とあり
6	油免たたら	宮市油免	たたら場、屋敷跡、カンナ井手など遺構らしきものあり
7	たたら屋敷たたら	杉谷たたら屋敷	集落の西、高殿たたらの典型。自然石の金屋子さんあり
8	柿木五輪たたら	美用柿木五輪	伝承なし、石垣に製錬滓塊混入
9	たたら屋敷たたら	美用たたら屋敷	「美用型たたら」の典型　石垣区画のたたら場あり
10	鍛冶屋敷たたら	美用鍛冶屋敷	江戸時代後期の「美用型たたら」の高殿たたら
11	猿垣鍛冶場	御机猿垣	寛政３年「金屋子神社奉加帳」に御机鍛冶屋とあり
12	川平鉄山	久連川平	近藤家の鉄山、大正年間に操業停止した明治・大正期の代表的鉄山。「金屋子神社」、鉄池跡「伯耆誌」にも記載あり、近藤家以前のものか
13	庄谷たたら	久連庄谷	野だたらか、製錬滓散布
14	大谷たたら	久連大谷	「伯耆誌」に大谷鉄山の記載あり
15	継岩たたら	久連継岩	「伯耆誌」に記載あり。江戸末期の川平型たたら。鉄池、金屋子神社あり
16	継岩南たたら	久連継岩	伝承なし、製錬滓散布
17	寺谷たたら	下安井寺谷	伝承なし、製錬滓散布
18	寺谷鍛冶場	下安井寺谷	寺谷たたらの粗鉄を精錬か、鍛冶滓散布
19	小林鍛冶場	下安井小林	「伯耆誌」の下安井・カツチ山か
20	岡ノ田鍛冶場	下安井岡ノ田	伝承なし、鍛冶滓散布
21	宮ノ前鍛冶場	下安井宮ノ前	伝承なし、鍛冶滓散布
22	荒田たたら	下安井荒田	「金屋子神社奉加帳」に荒田鍛冶屋とあり
23	城ノ谷たたら	武庫	小舟２基露出。江戸中～後期の高殿たたらか
24	三谷たたら	武庫	「金屋子神社奉加帳」に三田鍛冶屋か、製錬滓散布し、たたら・大鍛冶を行う。何度か時代を代えて行った形跡がある。江戸中～後期のもの。
25	高谷下鍛冶屋鍛冶場	武庫高谷	伝承なし、鍛冶滓散布
26	高谷・タンボたたら	武庫高谷	「伯耆誌」に武庫上高谷鉄山とある。 文政３年の鉄山墓あり。
27	篠谷・横路たたら	俣野篠谷	「伯耆誌」の岸谷山か。石組水路等山内の施設の跡あり、江戸後期の鉄山墓あり。尾根の南東側にカンナ場、カンナ井手が残る。
28	たたら屋敷たたら	俣野尾上原	伝承なし、製錬滓散布
29	たたら床たたら	俣野尾上原	製錬滓散布、江戸後期の鉄山墓10基あり
30	ワニ口林たたら	俣野ワニ口林	小字名に金クソ坂あり。地形変化し不明
31	蛇喰山たたら	俣野蛇喰山	「伯耆誌」の蛇喰山鉄山で、製錬滓多量に散布
32	山の神原たたら	俣野深山口	伝承なし、製錬滓散布
33	深山口屋敷たたら	俣野深山口	高殿たたら跡か、製錬滓散布
34	吉ケ谷たたら	俣野吉ケ谷	「伯耆誌」の吉ケ谷たたらにあたる。製錬滓散布し高殿たたらとして古い形態か。
35	穴ケ屶たたら	俣野穴ケ屶	鍛冶滓散布、野だたらか鍛冶場跡。
36	切詰山たたら	俣野切詰山	「伯耆誌」の切詰鉄山か、石列囲いが残る。
37	家奥たたら	助沢家奥	伝承なし、製錬滓散布、金屋子神社あり。

第３章　調査の概要

第１節　川平鉄山跡の概要

川平鉄山跡は鳥取県生産遺跡分布調査報告書（1984）に報告されている製鉄遺跡であり、「近藤家の鉄山で大正年間に操業を停止。明治・大正期の代表的な鉄山で『川平型』たたらの典型である。」と記されている。

現況は杉や桧の山林と畑地、雑種地、宅地となっており、山裾に住宅が２軒所在する。川平山谷川の両岸に高殿、鉄池、砂鉄洗い場、大鍛冶場であったと考えられる地形が観察され、また山腹に金屋子社の跡も残っている。そして川平山谷川の両岸一帯の地表には廃滓された大小の鉄滓が多量に堆積散布している。

高殿跡

砂鉄洗い場の北側に接する位置にあり、現況は杉林となっている。こんもりとした高みの平坦面は約20ｍ×15ｍの規模を測る。南側の砂鉄洗い場側と東側には石垣が築かれている。本床の位置は不明であるが、平坦面中央に数個の人頭大の礫がみられ、この付近と考えられる。

砂鉄洗い場跡

高殿の南側に接しており、現況は杉林･桧林となっている。平坦面は台形状で、西側26ｍ、東側13ｍ、北側17ｍ、南側20ｍ、東西幅17ｍの規模を測る。東側に鉄池が接している。砂鉄洗い場の北西隅は幅2.4ｍの高殿への斜路となっており、木戸を通して原料が運び込まれるようになっている。

平坦面の北側の高殿寄りに７ｍ×３ｍ前後の細長い窪地が観察され洗舟跡と推察される。窪地の東端は水路状の窪地が鉄池の方へ延びている。また、窪地の西端も水路状で山側の石垣へ向かっているが、木製の樋で砂鉄洗い場上段の水路から導水されていたと推察される。

砂鉄洗い場跡上段

砂鉄洗い場の西側と山裾の間に幅５ｍ、長さ30ｍほどの平坦面が造成されている。この平坦面からは発掘調査で石組が２基と小屋基礎縁石１か所が検出されている。

水路跡

砂鉄洗い場跡上段の山側に埋没した水路跡と思われる道状の段が砂鉄洗い場へ向けて続いているのが観察される。

鉄池跡

鉧を冷やす池で、現況は柿畑で高殿の南東側に接して設けられている。９ｍ×７ｍの楕円形で高殿との高低差が２ｍの窪地となっている。かなり埋没していると考えられるが、西側に石組が観察される。

銅小屋跡

高殿の東側に接して約20ｍ×11ｍの平坦面が観察される。水車小屋等の施設の痕跡は確認されないが、位置的に銅小屋が置かれていたと推察される場所である。

石組水路

砂鉄洗い場と元小屋、大鍛冶場の間を流れる川平山谷川の両岸は、石垣が築かれて石組水路となっている。石組は連続しているが積石面の違いが数面観察されるため、数回にわたり積まれて現在の石

垣となったものと推察される。

大鍛冶場跡

砂鉄洗い場の南､川平山谷川の対岸に位置する。調査時には砂防堰堤工事用の道路で削られており、地形が大きく変わっている。工事前の地形測量図では、対岸の山斜面に40ｍ×10ｍ、25ｍ×7ｍ、25ｍ×12ｍの３か所の平坦面が観察される。対岸の川沿いの斜面には鍛冶滓の廃滓やふいご羽口が表採されており、３か所の平坦面に大鍛冶場が置かれていたと推察される。

元小屋跡

砂鉄洗い場の南、川平山谷川の対岸で大鍛冶場の東側に広い平地があり、現在は岡本家の宅地敷地となっている｡母屋の西側に木造の倉庫があり､現在は板屋根にトタン葺であるが元小屋の建物であった可能性が高く、当時の元小屋の一部が残存したものと推察されている。

金屋子社跡

砂鉄洗い場の西15ｍの山の斜面に、15ｍ×５ｍの段状の平坦地が造成され、祠の基壇と台座が残されている。金屋子社の跡である。社へは高殿から斜面を登るように細い参道が続いている。

鉄山墓

高殿から北80ｍの山裾に岡本氏の墓地があり、岡本家墓地から更に北15ｍの山裾にも墓地がある。岡本家の墓地の古い墓石には大正４年の年号が刻まれている。北の山裾の墓地には明治の年号が刻まれた墓石が５基ある。

廃滓場跡

高殿、銅小屋周辺の地表には、廃滓が散布しており、特に北側は大量の廃滓が観察され、高殿から排出された鉄滓が長期間に亘り捨てられた場所と推察される。岡本家墓地の平坦面も長年の廃滓により形成された平場であると考えられる。

第２節　調査の方法

調査は前述のように川平山谷川砂防工事に伴う緊急調査であり、河川流路の変更により影響のある川平鉄山の一部368㎡を対象とした。対象地は砂鉄洗い場の一部と考えられる場所である。

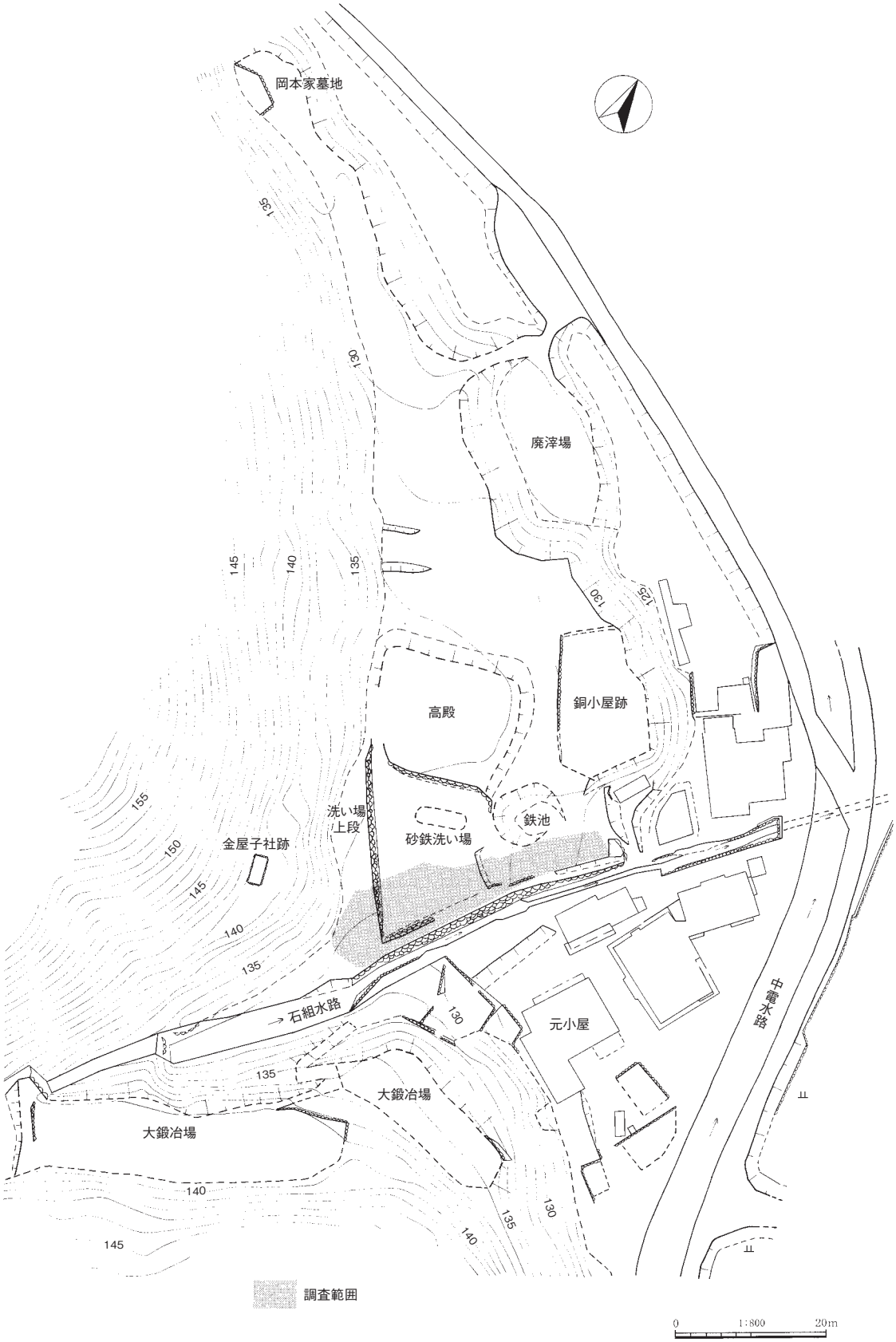
当初は測地公共基準点が無かったため、川沿いに築かれていた石垣土塁の線を基軸にして、調査対象地をカバーできる５×９ｍのグリッドを任意に設定した。上流からＡ０区～Ａ７区の区画を設定し調査した。

調査は、大木の杉、桧林を日野森林組合に委託して伐採し撤去・搬出を行った後に、重機により表土除去を行い、その後は人力により遺構検出を行った。

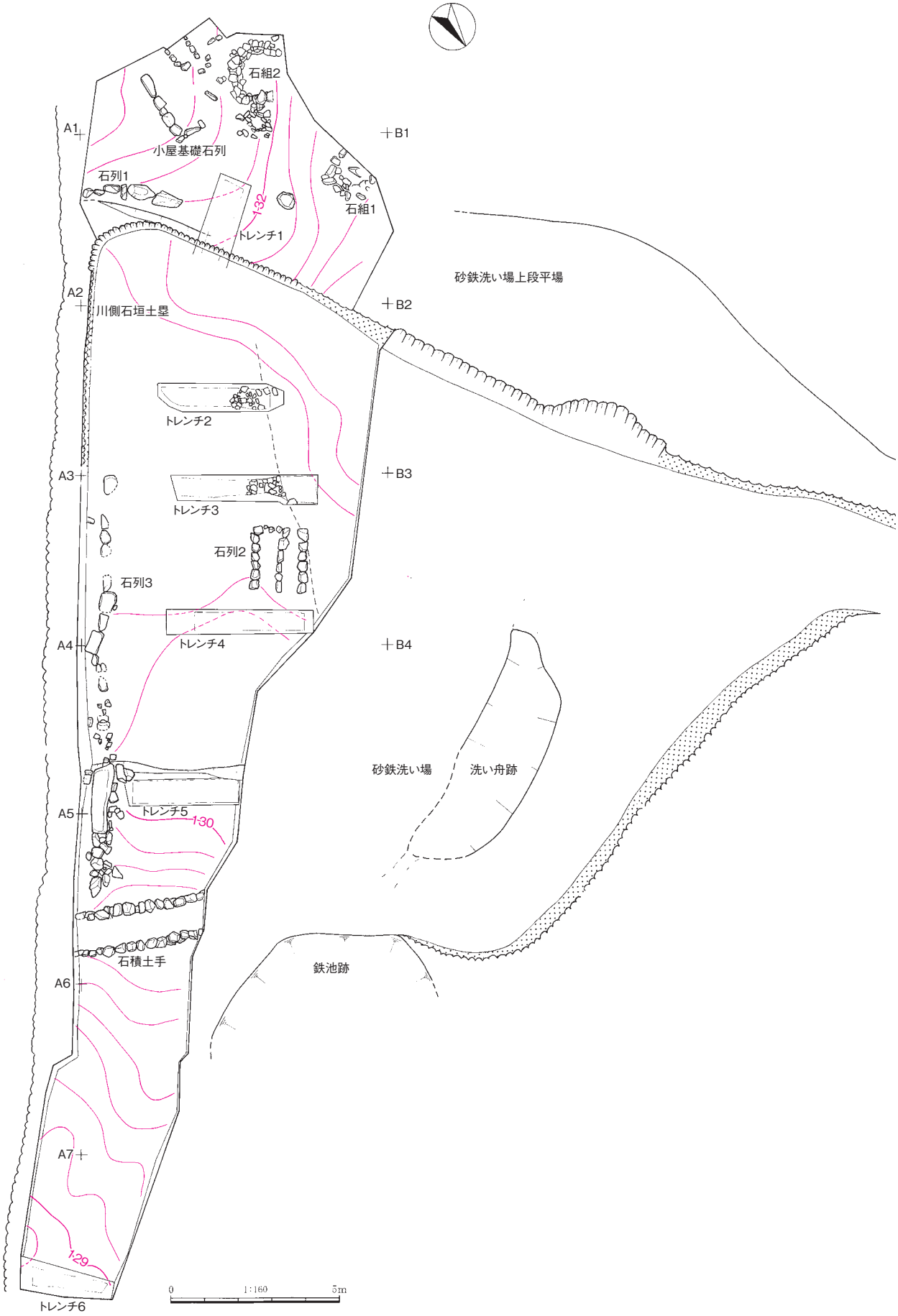
図面記録作成は、平面図作成と遺物の取り上げはトータルステーションを用い、遺構図については手測りで行った。

写真記録は、一眼レフカメラによるリバーサルフィルム、白黒フィルムで行い、デジタルカメラを補足的に使用した。

整理作業は、持ち帰った出土遺物を洗浄後、実測と写真撮影を行った。報告書作成は遺構図面の作成後、トレースを行い、本文作成し遺構図版、写真図版とともに編集した。



第３図　川平鉄山跡地形図



第４図　調査区遺構配置図

第３節　検出された遺構

１　砂鉄洗い場上段平場（Ａ０、１区）

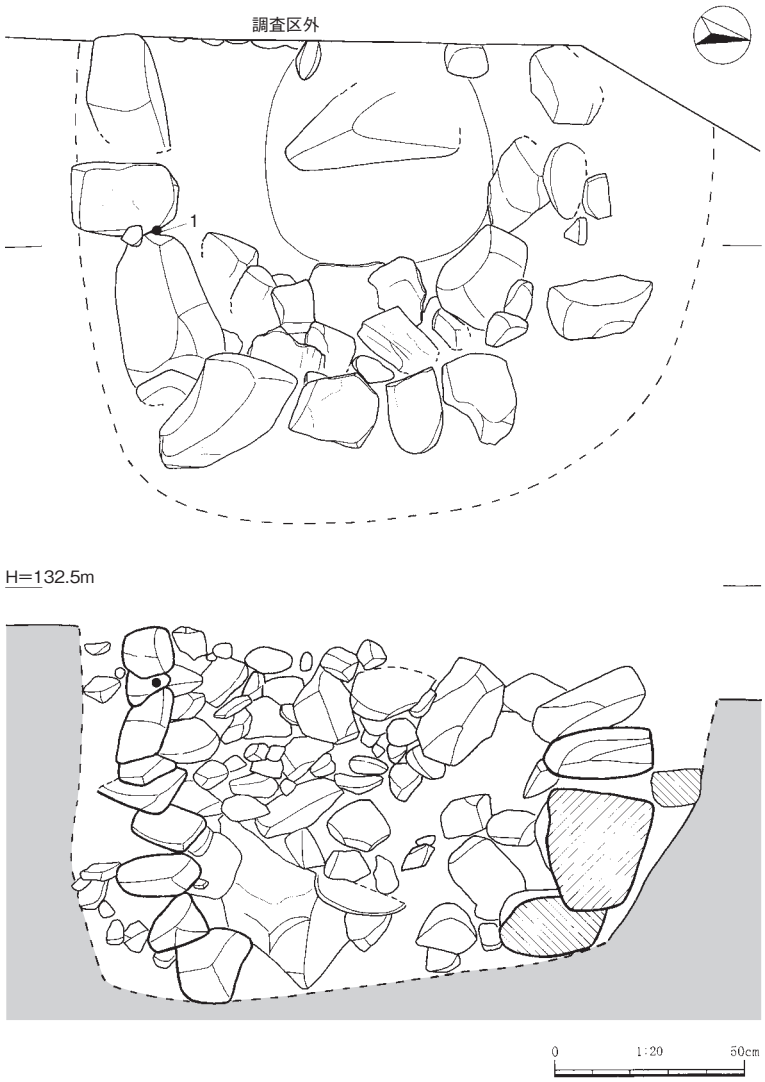
砂鉄洗い場上段平場は、砂鉄洗い場西側と山裾の間に幅５ｍ、長さ30ｍの長細い平坦面で、砂鉄洗い場との比高1.8ｍを測る。調査地は南側の長さ10ｍ弱の範囲を対象とした。表土除去後に石組１、２と小屋基礎石列、石列１を検出した。

（１）石組１（第５図）

小人頭大の円礫、角礫、鍛冶滓で組み上げられており、内部に円礫、角礫、鉄滓が投げ込まれ埋没していた。石組西側の山斜面側は調査区外のため追及できなかった。石組は上縁が１ｍ×0.9ｍ＋αの隅丸方形状で、底面が0.6ｍ×0.5ｍの楕円状で、深さ１ｍを測る。石組内面は被熱を受けて赤変・黒班が観察された。底面には２～３センチの炭層が確認された。平場造成後に築かれたと考えられるが、掘方は確認できなかった。

石組内部から遺物は検出されなかったが、石組の上縁から染付瓶片が検出された。遺物は幕末頃の製品と考えられるが、伝世も考慮すると本遺構の時期は明治期と推定される。

石組１遺構は岡山県大成山たたら遺跡群Ｂ区石組１（岡山県教育委員会1999）と類似しているが、性格は不明である。

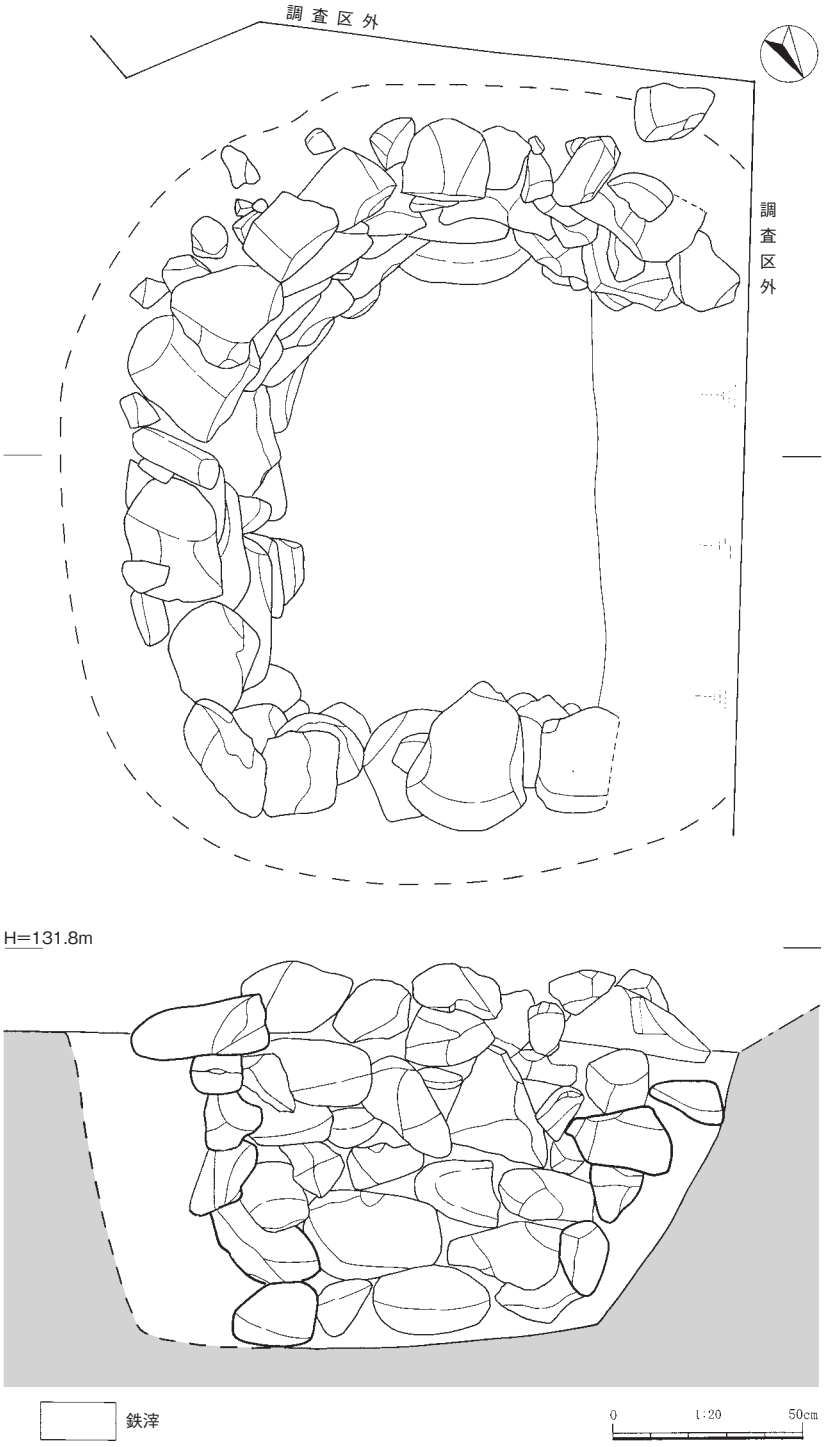


第５図　石組１　平面・立面図

（２）石組２（第６図）

石組１と同様に小人頭大の円礫、角礫、鍛冶滓で組み上げられており、内部に円礫、角礫が投げ込まれ埋没していた。石組西側の山斜面側は地山の岩盤を利用しており、石組は組まれていない。石組２は上縁が1.4ｍ×1.2ｍ、底部が1.1ｍ×0.8ｍの半楕円形状で深さ90㎝を測る。石組内面も石組１と同様に被熱を受けて赤変・黒班が観察され底面には２～３センチの炭の層が確認された。

内部から遺物は検出されなかったが、石組１と同様な時期と推定される。石組２遺構も岡山県大成山たたら遺跡群Ｂ区石組１と類似するが、性格は不明である。

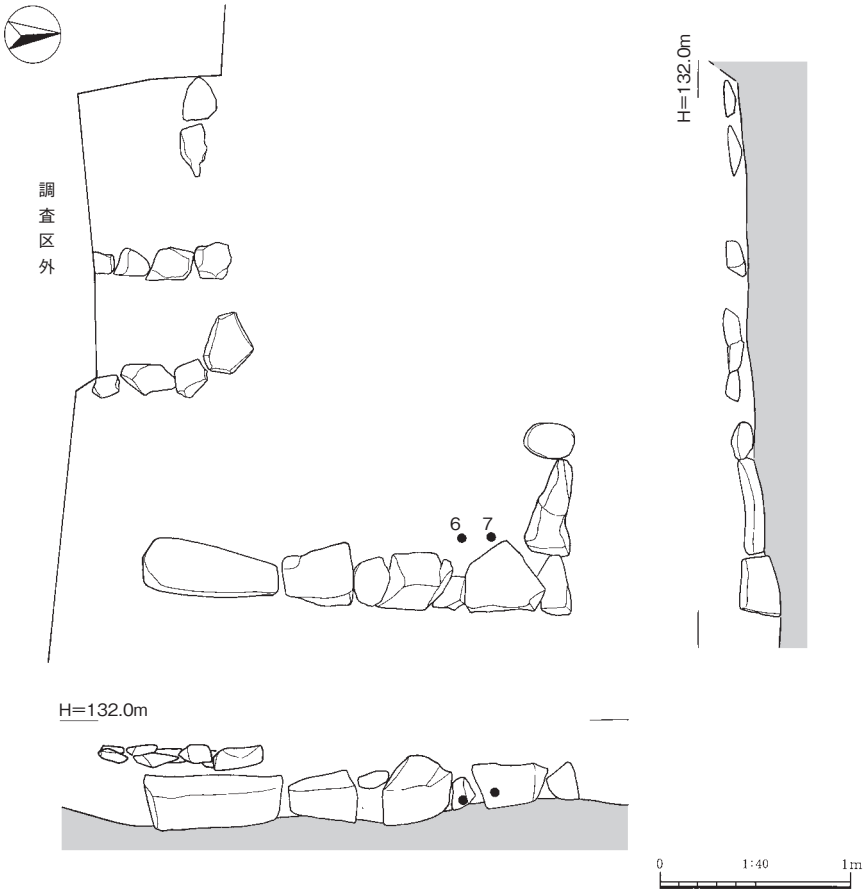


第６図　石組２　平面・立面図

（３）小屋基礎石列（第７図）

地山の角礫等で面をそろえたL字の石列である。東辺は北角石を含め７個の角礫が長さ2.2ｍ並んでいるのが検出されたが、南の川側は確認されなかった。北辺は北の角石から３個の角礫、楕円礫が長さ１ｍ並んでいるのが確認された。角礫は大きいもので70×30×15㎝であった。石列内の南側にやや小さい角礫４個を二列に並べたものが検出されたが、この石列は小屋基礎石列内の埋土の微細粒鉄滓層の上にあり、小屋基礎石との関係は判然としないが、小屋に伴う遺構の可能性が推察される。また、石組２が小屋基礎石列の北側を壊して作られており、小屋基礎石列は、石組２よりも古い遺構であると考えられる。

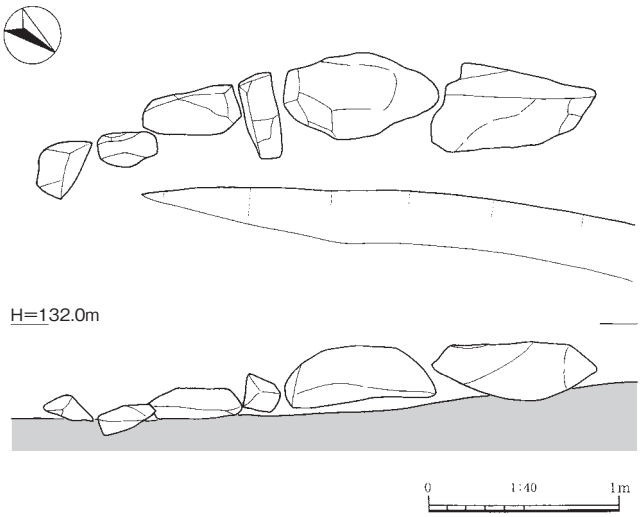
この平坦面の山側斜面に砂鉄洗い場への水路があり、立地から見て水車小屋の基礎石の可能性が考えられる。遺物は小屋基礎石列内の微細粒鉄滓層から鉄鎌が検出されたが、時期の判別できる遺物がないため、本遺構の時期は確定できないが明治期と推定される。



第７図　小屋基礎石列　平面・立面図

（４）**石列１**（第８図）

小屋基礎石列内の東、砂鉄洗い場上段平場の縁に大形の礫６個が長さ３ｍ程度並んでいるのが検出された。上段平場石垣の天端石とも考えられるが、性格は不明な石列である。伴出遺物はないが上段平場の時期と同様と考えられる。



第８図　石列１　平面・立面図

（５）造成地層と石垣

砂鉄洗い場上段平場の地層は、地山岩盤が山際から急傾斜で落ちこんでおり、平場は真砂土や礫、鉄滓を含んだ土砂を埋めて石垣を積んで造成されていた。表土直下の第２層は微細粒の鉄滓が厚さ10㎝堆積していた。この層は人為的に撒かれたものか、上流から水路を通して運ばれたものが堆積したものか不明であるが、平場造成後に堆積したものである。

遺物は第２層中から染付瓶片、染付丸形碗、染付色絵小皿が検出された。産地は不明であるが18世紀末から19世紀のものである。

この平場の性格は不明であるが、幕末から明治の時期に砂鉄洗い場の整備に伴い造成されたものと考えられる。

①上段平場石垣（第10図右）

石垣は高殿への斜路から川側石垣土塁までの長さ26ｍで、調査地点で砂鉄洗い場からの比高1.8ｍを測る。石垣の下部は70×40㎝前後の大きい基礎石を置き、その上部は30×20㎝前後の小さい礫を10段前後乱積みにして築いている。川側から６ｍの間の石垣は下部の大きい基礎石を残して他は崩落していた。この石垣は上段平場を築くために築かれたもので、高殿の木戸入口斜路に擦りついて消えている。

②トレンチ１（第９図）

砂鉄洗い場上段平場の地業を観察するために入れたトレンチである。石組２があったため、上段平場石垣側２ｍのみにトレンチを入れ観察した。表土は腐食土と植物の根を含む黒褐色土で、第２層は微細粒鉄滓層である。第３層は黄色の真砂土で低い土塁状の盛り上がりを呈する。第４層～10層は真砂土、黒色土、礫、鉄滓が混在する造成土である。西側の地表面から深さ1.5ｍで地山礫層が確認されている。造成時の地表が第４層上面と考えられる。

２　砂鉄洗い場平場（Ａ２～７区）

砂鉄洗い場は台形状の平坦面である。川側は低い石垣土塁を築いている。このうち調査対象地は川沿いの長さ約30ｍで、西側で幅８ｍ、東側で幅４ｍを測る範囲である。平坦面はＡ５区で30㎝の段差があり、二段の平坦面となっていた。平場からは砂鉄洗い場に伴う建物跡の遺構は検出されなかったが、土塁、石列、石積土手が確認された。

（１）川側石垣土塁（第10図左）

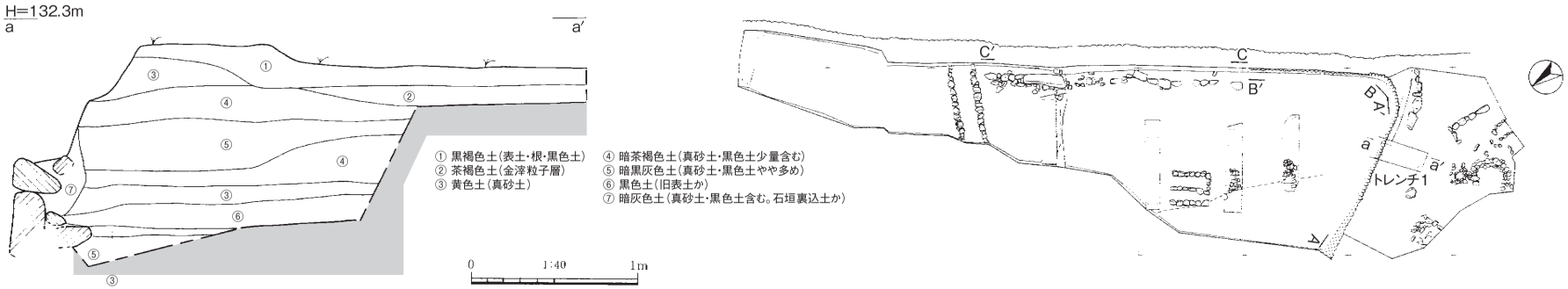
人頭大の礫を２～３段積んで、砂鉄洗い場の平坦面からの比高80～60㎝の低い土塁状に築かれた石垣である。川面側の石垣は川底から高さ３ｍを測る。

砂鉄洗い場の川側縁沿いに長さ6.5ｍ続いて、Ａ３杭辺りで終わっている。

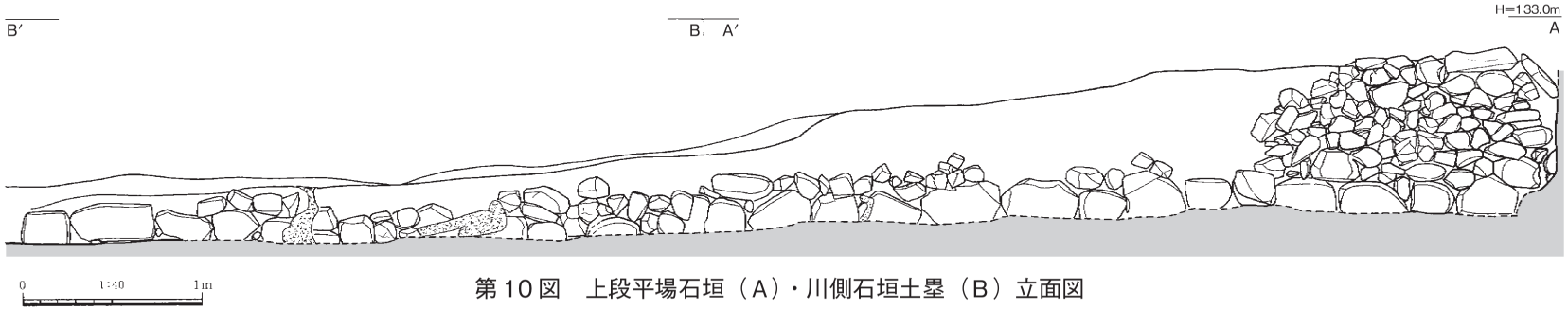
（２）石列２（第12図）

Ａ３区の地表に礫が３列に並ぶ石列が確認された。人頭大の礫６個が50㎝間隔で３列並べられており、上部にはトタン板が数枚重ねて置かれていた。当初は砂鉄洗い場に関係する遺構と考えたが、表層中に存在していたため、極最近のものの可能性が高く、性格は不明である。鉄洗い場に直接関係する遺構ではないと考えられる。

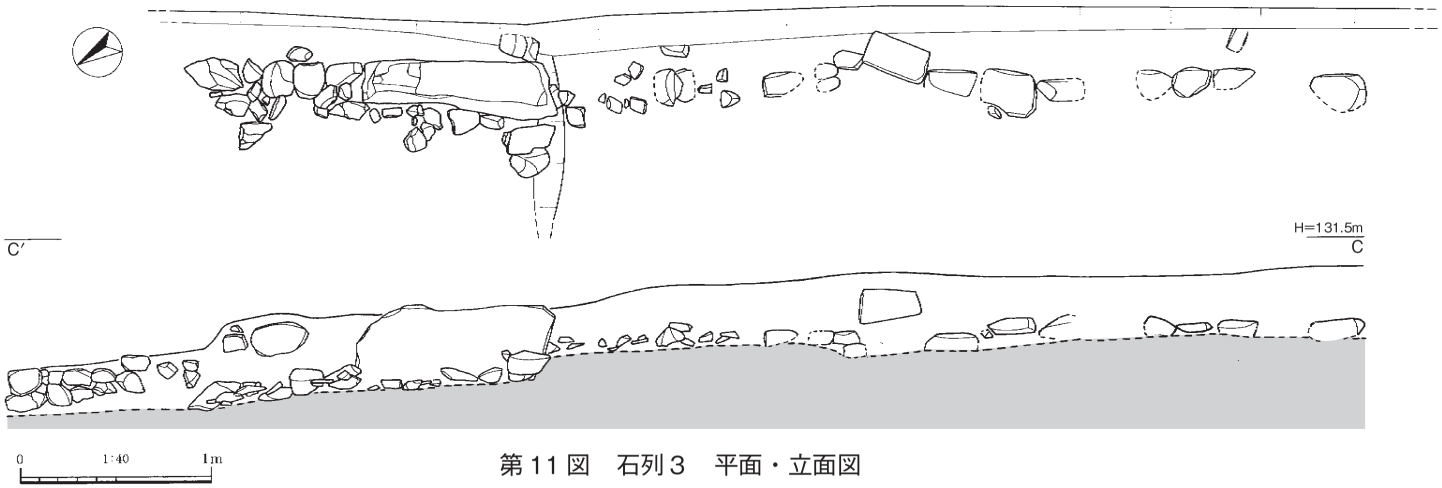
（３）石列３（第11図）



第９図　トレンチ１　土層断面図



第１０図　上段平場石垣（Ａ）・川側石垣土塁（Ｂ）立面図



第１１図　石列３　平面・立面図

Ａ３区からＡ５区の半ばまで、土塁に添うように人頭大礫の石列が続いているのを検出した。川側石垣土塁が途切れる所から石積土手までの間の長さ12ｍが確認された。川側石垣土塁の石積が途切れる地点から始まることから、石積が崩落したものと当初は考えたが、土塁と石列の間に幅30㎝の溝状の落ち込みが認められたことと、石列の面がそろっていることから砂鉄洗い場の排水溝の縁石列の可能性が高い。このことから、ある時期に石垣土塁の石を外して排水溝の縁石に作り変えたのではないかと推察される。また、石列のＡ５区付近には長さ２ｍ、厚さ0.5ｍ、高さ0.8ｍの巨大な長方形の石が置かれていたが、この巨石の性格や用途は不明である。

（４）石積土手（第13図）

Ａ５区の東側に幅1.2ｍ、高さ0.4ｍの土手状の石積みが、北西から南東方向へ長さ3.8ｍにわたり検出された。北西側は鉄池の西縁へ向かって伸び、南東側は川側土塁へ続いている。土手の両側に人頭大の円礫を二段に積んでいた。土手の土層は黄白色土と黒褐色土の互層で、上面は真砂の黄色土で化粧積みされており、砂鉄洗い場を区画するような遺構と考えられた。断面の土層観察では、土手の最下層が浅いＵ字状を呈し砂鉄を含む灰色砂層が確認されており、鉄池からの排水施設とも考えられ石積み溝の可能性もある。位置を川側の石垣で観察すると、Ｕ字状に追加積みされたと考えられる石垣部分にあたり、本遺構との関連を示しているとすれば、土手内土層が溝内堆積層で石積み溝の可能性も考えられる。遺構の逆検出を行った可能性を付記しておく。

（５）川側石垣（第16図）

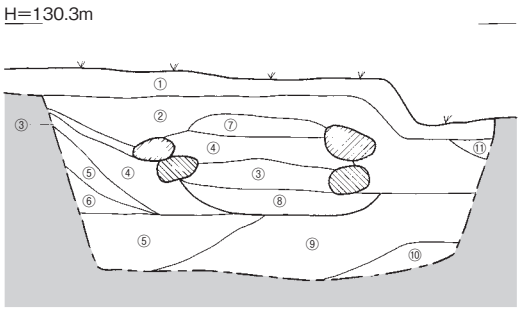
Ａ１区～７区まで上段平場～砂鉄洗い場を構築するために川側に築かれた高い石垣である。石垣面を観察すると、積み方の違いが観察され、場所的に前後関係が認められる。Ａ０区～７区の間には、基本的に大型の割石と人頭大の小型の円礫を用いて積まれている。その中でＡ１区～３区の間はＵ字状に大形の円礫で積まれており、当初の大型割石と人頭大小型円礫積みの石垣を補修積みしたことを物語っている。何らかの理由で当初の石垣が崩落したため補修されたものであろう。また、Ａ５区の石積土手のあたりの石垣は、Ｕ字状に小形の円礫で積まれており、追加して積まれたことを物語っている。また、Ａ３区～５区の上部の石垣は下部の石垣に比べて小さいものが多く、ここも補修されたと考えられる。石垣の構築や補修の時期は不明であるが、随時整備や補修がされて行ったことが推察される。

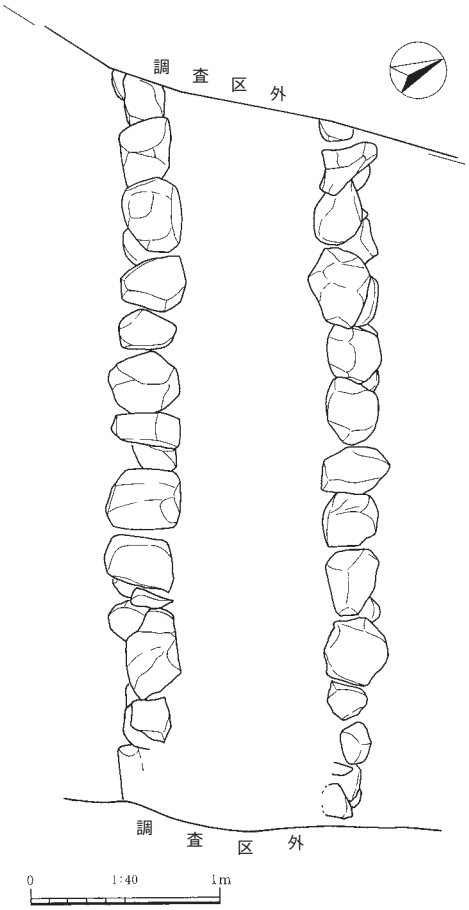
（６）造成地層と埋没石垣

砂鉄洗い場の平場造成地業を観察するためにトレンチをいれて造成地業を観察した。土層は川側石垣へ向けて斜めに落込む土層を示し、黒色土層の中には流失滓や鍛冶滓を多数含んでいた。トレンチの２か所で崩落した埋没石垣の石積みが確認されており、川側への廃滓を繰り返した後、ある時期に砂鉄洗い場の拡張整備を行ったことを示していた。

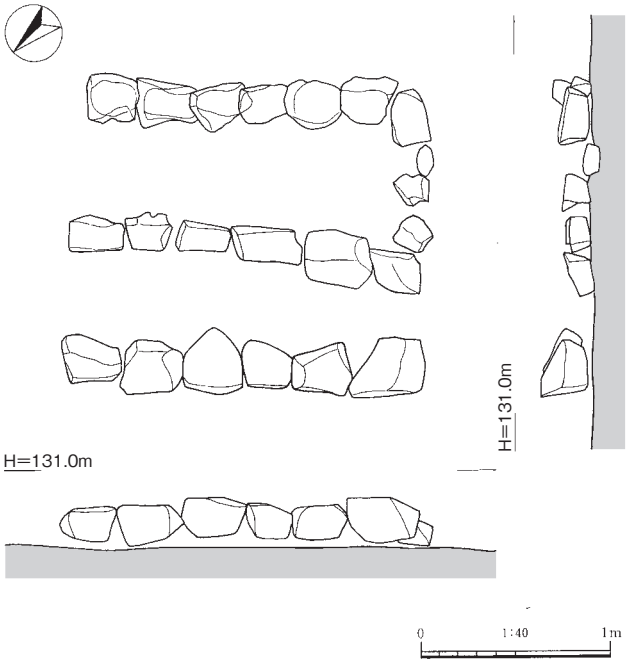
①トレンチ２（第17図）

トレンチ３で埋没石垣が確認されたため、その追求のために２ｍ西側のＡ２区に入れた。トレンチ２の北西端で、地山が40度前後の傾斜で川側へ落ち込んでいるのが確認された。地山傾斜に沿って小人頭大や小礫が検出されており、崩壊した埋没石垣の名残りと考えられる。その上層には灰黒色土、黒色土、茶褐色真砂土の互層が地山の傾斜に沿うように堆積していた。灰黒色土と黒色土中に流失滓や鍛冶滓を多数含んでいた。このことは埋没石垣ラインが当初の砂鉄洗い場の範囲で、北西側から川

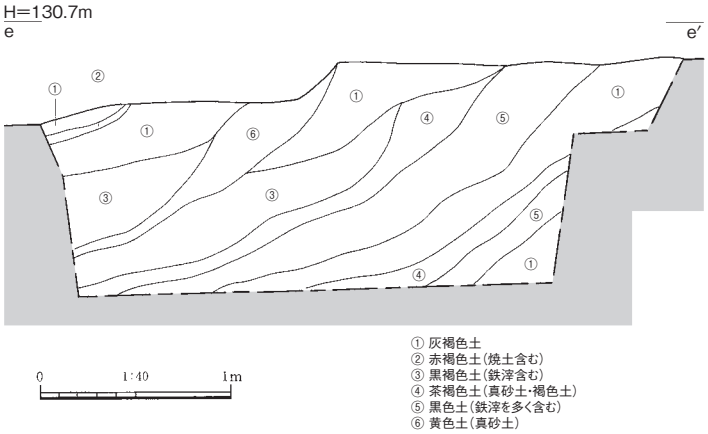




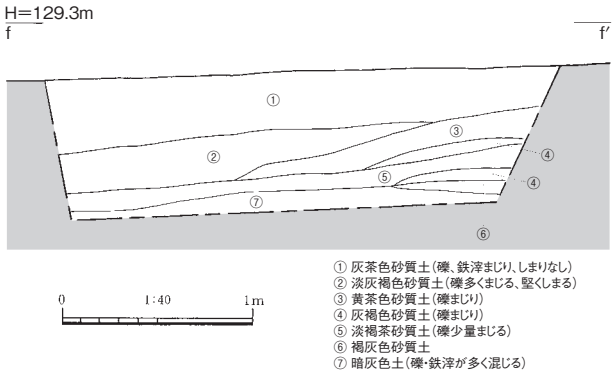
第 13 図　石積土手　平面・断面図



第 12 図　石列２　平面・立面図



第 14 図　トレンチ５　土層断面図



第 15 図　トレンチ６　土層断面図

側へ廃滓と土砂が順次埋め立てられていったことを示していた。

②トレンチ３（第18図）

Ａ３～Ｂ３ラインの造成地業を観察するために設定したトレンチである。トレンチの北西端から２ｍ南東で地山が確認され、45度の傾斜で川側へ落ち込んでいる。地山に沿って小人頭大や小礫が検出され、崩壊した埋没石垣の名残りと考えられる。その上層には灰黒色土、黒色土、黒灰色土、茶褐色真砂土、石粉白色土の互層が地山の傾斜に沿うように堆積していた。灰黒色土と黒色土中には流失滓や鍛冶滓を多数含んでいた。

このことは、トレンチ２と同様に埋没石垣ラインが当初の砂鉄洗い場の範囲で、北西側から川側へ廃滓と土砂が順次埋め立てられて行き、ある時期に現在の砂鉄洗い場に造成したことを示していた。

③トレンチ４（第19図）

Ａ４～Ｂ４ラインの造成地業を観察するために設定したトレンチである。トレンチの北西端では地山が確認されなかった。また、埋没石垣のなごりも確認されなかった。造成地層は45度の傾斜で川側へ落ち込んでおり、灰黒色土、黒色土、黒灰色土、茶褐色真砂土の互層が45度の傾斜で堆積していた。灰黒色土と黒色土中には流失滓や鍛冶滓を多数含んでいた。トレンチ２、３と同様に北西側から川側へ廃滓と土砂が順次埋め立てられて行き、ある時期に現在の砂鉄洗い場に造成したことを示していた。

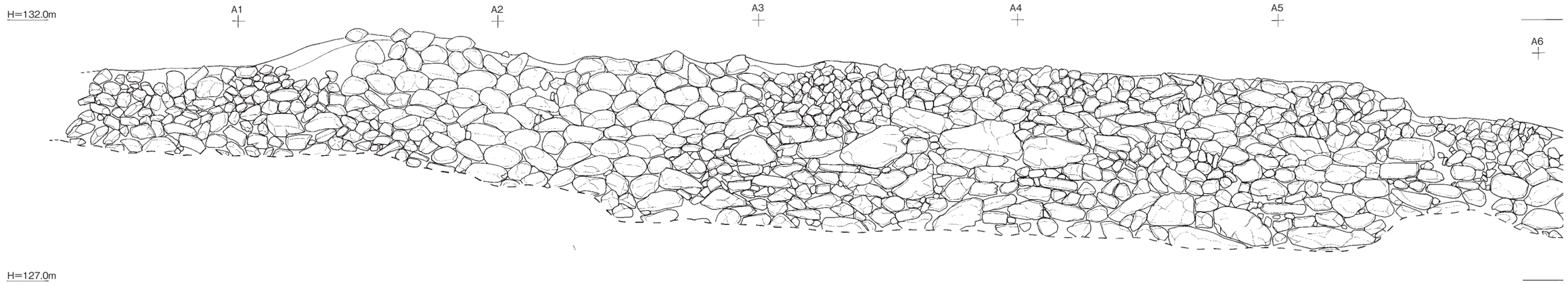
また地山や埋没石垣ラインが、トレンチ端の北西側にあると推察され、当初の砂鉄洗い場の範囲が、南西から北東へ延びる埋没石垣ラインを結んだ線以北にあったと考えられる。

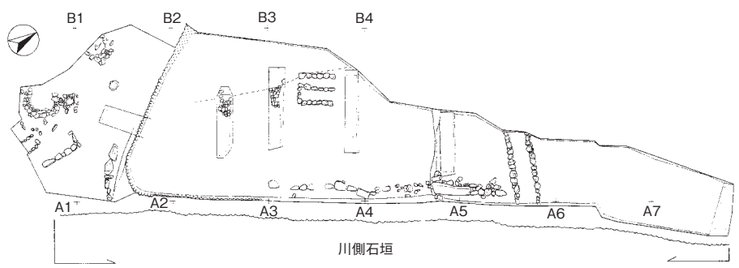
④トレンチ５（第14図）

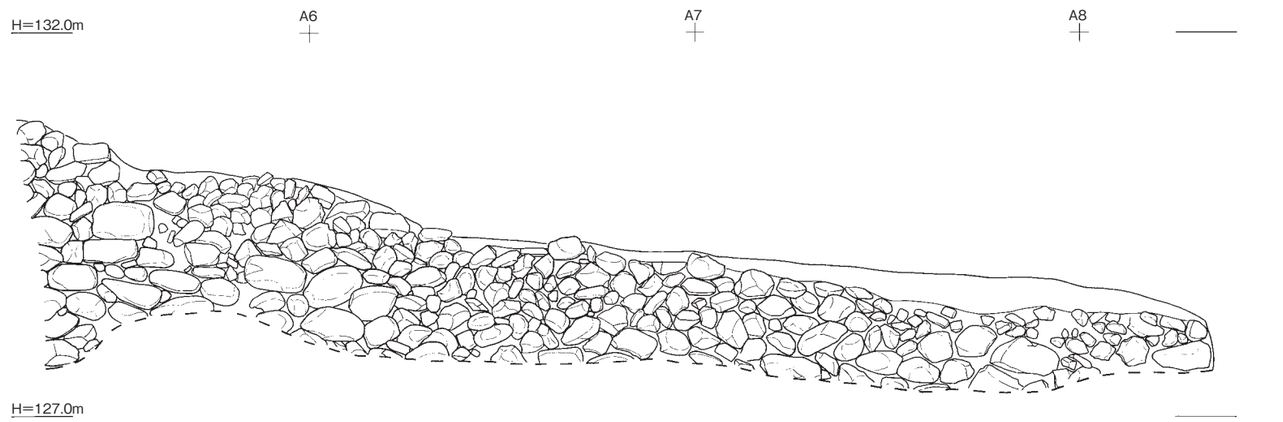
Ａ５～Ｂ５ラインの造成地業を観察するために設定したトレンチである。トレンチの北西端では地山が確認されなかった。また、埋没石垣のなごりも確認されなかった。造成地層は45度の傾斜で川側へ落ち込んでおり、灰褐色土、赤褐色土、黒褐色土、茶褐色真砂土、黒色土、黄色土の互層が45度の傾斜で堆積していた。灰褐色土と黒色土中には流失滓や鍛冶滓を多数含んでいた。トレンチ２、３、４と同様に北西側から川側へ廃滓と土砂が順次埋め立てられて行ったことを示していた。

⑤トレンチ６（第15図）

Ａ７区の調査対象地の西端の造成地業を観察するために設定したトレンチである。トレンチ６では地山は確認されず、すべて造成土層であった。造成土層は他のトレンチと異なり15度前後の緩い傾斜で川側へ落ち込んでおり、灰茶褐色土（表土）、淡灰褐色土、黄茶褐色土、淡褐色土、茶褐色真砂土、灰褐色土、褐灰色土、暗灰色土の互層である。各土層は全体に硬く締っており、砂粒状の微細な鉄滓と流失滓を多数含んでいた。トレンチ２～５と同様に北西側から川側へ廃滓と土砂が順次埋め立てられて行ったことを示していた。

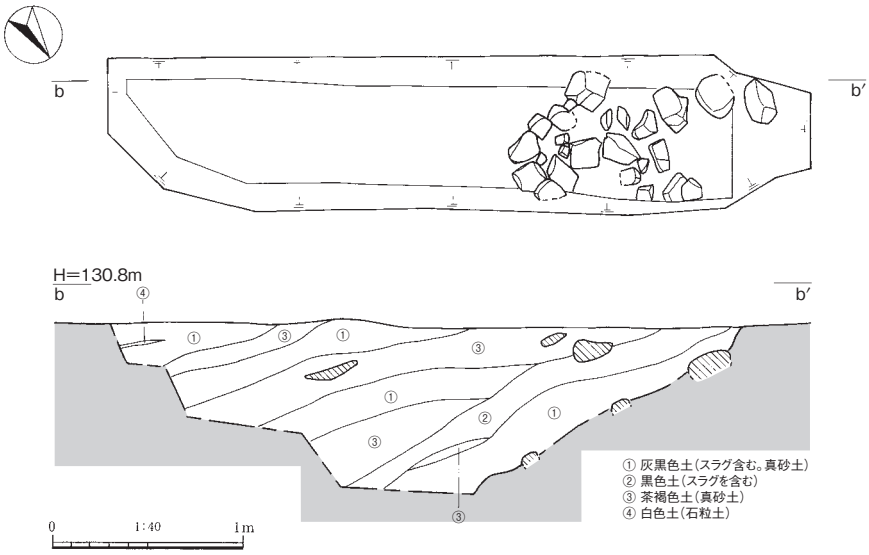




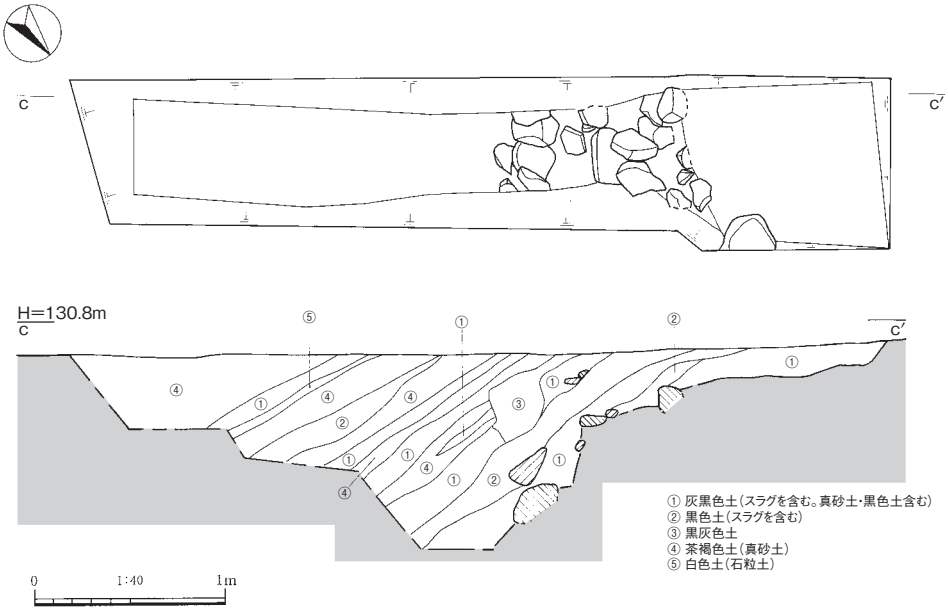


0 1:80 4m

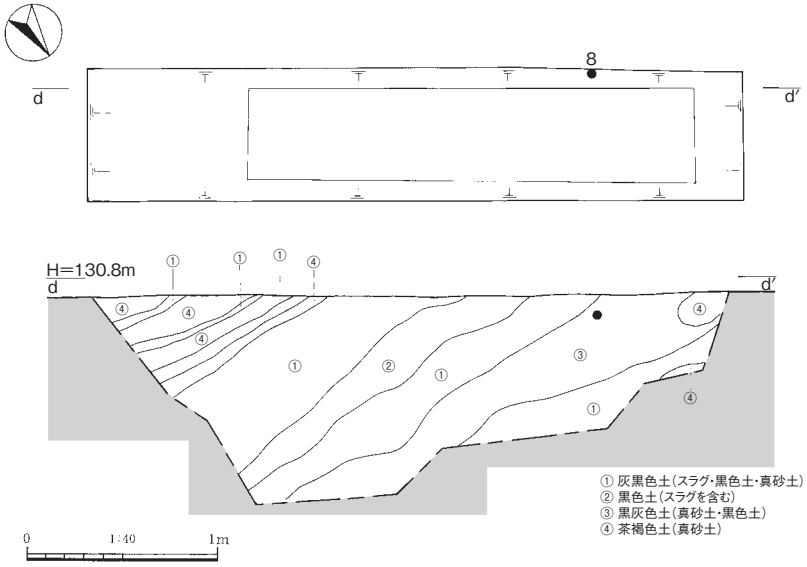
第16図　川側石垣　立面図



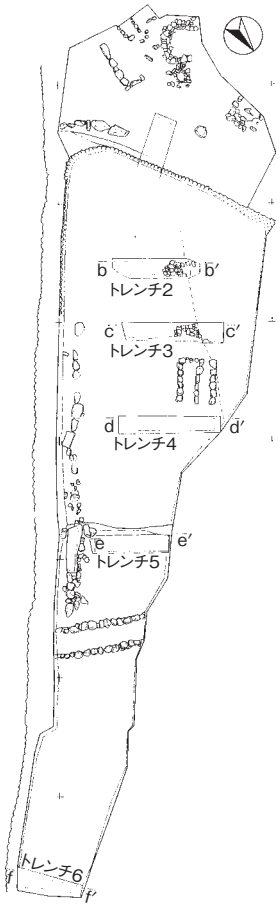
第 17 図　トレンチ２　平面・土層断面図



第 18 図　トレンチ３　平面・土層断面図



第 19 図　トレンチ４　平面・土層断面図



第４節　検出された遺物

今回の調査で検出された遺物の大半は大量の鉄滓であったため、鉄滓についてはサンプル的にしか取り上げなかった。砂鉄洗い場平場からの出土遺物は極わずかで、染付磁器４点と鉄製品４点のみという、ごく少量であったため、土地所有者の岡本氏が採取されていた羽口や鉄滓遺物の提供を受け、実測して掲載した。

１　陶磁器（第20図１～５）

１は染付瓶の底部片で、石組１の肩部で検出されたものである。底径4.3㎝の小形のもので輪高台の神酒徳利である。２は染付瓶の胴部片で、石組１の付近の第２層で検出されたものである。底径4.3㎝の小型のもので輪高台の神酒徳利である。３はトレンチ１の第２層で検出された染付色絵小皿小片である。底径4.8㎝の小型のもので輪高台の端反りの小皿である。4は染付丸形碗の口縁片でトレンチ１付近の第２層で検出されたものである。これらはいずれも第２層の微細粒鉄滓層からの出土で、斜面上部に位置する金屋子社に供献されていたものが落下したと考えられる。５は川から表採されたもので、口径10㎝の形押皿で見込みが蛇目である。いずれも産地は不明であるが、３は明治期のもので、他は18世紀末から19世紀中葉のものと考えられる。

２　金属品（第20図６～９）

６は鉄鎌で、小屋基礎石列内部の第２層の微細粒鉄滓層から検出されたものである。刃長17㎝、元幅2.8㎝を測るが錆化が著しい。７は６の近くで検出された鎌の柄であり、６の柄と考えられるが直接接合しないので、一応別物として扱う。木質の柄部分径2.2㎝、長さ8.5㎝が残存している。８はＡ３区の造成埋土中の釘。９はトレンチ１の第２層で検出された長方形の薄い鉄板が半分に折り曲げられたもので用途は不明。

３　羽口（第20図10～14）

羽口５点はいずれも岡本氏の採取品で、採取場所は定かでないが大鍛冶場下の川から斜面にかけての地点と推察される。残存長は最大で11.2㎝、直径は最大で9.1㎝、最小で8.0㎝、孔径は最大で3.8㎝、最小で3.0㎝を測る。浅い挿入角度から大鍛冶炉に使用されていたものと考えられる。いずれも先端に鉄滓が付着し、10には被熱痕跡が見える。

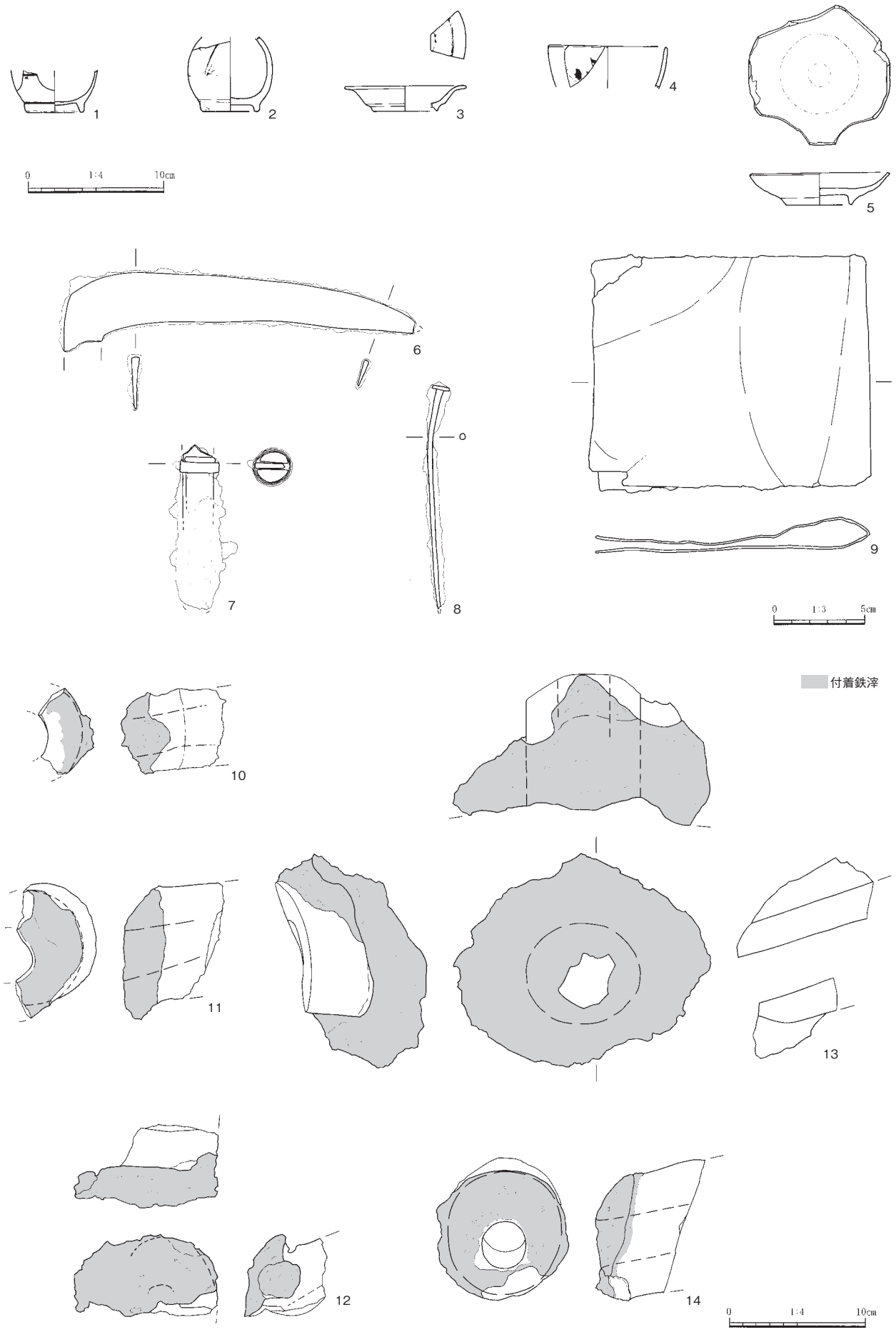
４　炉壁・鉄滓（第21図15～18）

鉄滓は調査地内の表土、造成土内、石組内に大量に散布、包含されていた。椀形滓、炉床滓、流出滓、製錬滓、鍛冶滓などであった。図示したものはサンプル的に採取した中の一部である。

15は上段平場から出土した炉壁で、粘土に溶融したガラス質に鉄が付着している。16は岡本氏の表採品の製錬滓の流出滓で、底面に溝の形状が観察される鉄滓である。17はＡ０区の石組２から検出された鍛冶滓で、炉床の形状が観察されるものである。18はＡ０区の石組２で石の代用として積まれていた大鍛冶の炉床滓である。重量は11.6kgで上面には凹凸の襞があり木炭痕を含む。下面はゆるやかに湾曲し炉床の形状を残している。

５　砂鉄・木炭（写真19）

砂鉄洗い場の上面からは、砂鉄の堆積残が認められなかったが、石積土手内の最下層に砂鉄の堆積した土層が確認されサンプルを採取した。またＡ１区の石組1の埋土下層から長さ５㎝、幅４㎝、厚さ２㎝前後の木炭片を数点検出している。



第 20 図　出土遺物図（1）

第 21 図　出土遺物図（２）

第２表　陶磁器観察表

挿図番号	遺物番号	地区・遺構出土層位	種別 器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
20	1	Ａ１ 石組１	磁器 染付瓶	―	4.1	3.1＋	外面：呉須圏線 内面：無施釉	密	良好	灰白色	神酒徳利
20	2	Ａ１ 第２層	磁器 染付瓶	―	4.3	5.6＋	外面：呉須草文 内面：無施釉	密	良好	灰白色	神酒徳利
20	3	Ａ１Ｔ１ 第２層	磁器 色絵小皿	※9.0	4.8	1.9	外面：施釉無文 内面：赤絵、呉須圏線	密	良好	灰白色	小片
20	4	Ａ１ 第２層	磁器 丸形碗	※8.7	―	3.15＋	外面：呉須草花文 内面：施釉	密	良好	灰白色	細片
20	5	川 表採	磁器 型押皿	10.1	4.8	2.35	外面：底部まで施釉 内面：見込み蛇目	密	良好	灰白色	

第３表　金属製品観察表

挿図番号	遺物番号	地区・遺構出土層位	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
20	6	Ａ０小屋 基礎第２層	鉄鎌	19.5	2.8	0.4	76.1	刃部はほぼ残存し、柄部を欠く。
20	7	Ａ０小屋 基礎第２層	鉄鎌柄	9	1.9	0.4	60.9	柄の止め具と木質部が錆化残存。
20	8	Ａ３ 造成埋土	鉄釘	12.3	―	径0.3	16.9	頭部を含め、ほぼ残存する断面が丸い釘。
20	9	Ａ１Ｔ１ 第２層	鉄板	15.6	13.0	0.1	220.6	長さ30㎝の薄い鉄板が半分に折り曲げてある。

第４表　羽口観察表

挿図番号	遺物番号	地区・遺構出土層位	種別	法量(cm) 長さ	直径	孔径	重量(g)	備考
20	10	表採	鍛冶炉羽口	7.7	※8.2	※3.8	153.0	鉄滓が付着し、羽口に被熱の痕跡線が残る。
20	11	表採	鍛冶炉羽口	7.5	※8.4	※3.4	271.4	鉄滓が付着する。
20	12	表採	鍛冶炉羽口	6.1	※8.0	※3.0	225.3	鉄滓が付着する。
20	13	表採	鍛冶炉羽口	11.2	8.5	3.8	1433.4	鉄滓が大量に付着する。
20	14	表採	鍛冶炉羽口	8.0	9.1	3.4	520.2	鉄滓が付着する。

第５表　鉄滓・炉壁観察表

挿図番号	遺物番号	地区・遺構出土層位	種別	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	備考
21	15	Ａ１ 第２層	炉壁	15.5	10.5	8.2	1029.3	粘土に溶融したガラス質に鉄滓が付着する。
21	16	表採	流出滓	14.8	11.2	6.6	1503.2	底面がＵ字状となり、排出溝の形状を示している。
21	17	Ａ０ 石組２	鍛冶滓	16.4	12.3	6.6	889.8	底面に炉床形状を残す鍛冶滓。
21	18	Ａ０ 石組２	炉床滓	39.3	32.1	13.0	11.6kg	上面に木炭痕、底面に炉床形状を残す鍛冶滓。

第４章　近藤家文書からみた川平鉄山

たたら研究会　池本　美緒

はじめに

日野郡江尾村大字久連村（現江府町）に位置する川平鉄山[註1]について、経営者であった近藤家が所蔵する文書を基に、操業期間や場所、銑・鋼・鉄などの生産量や出荷先、大炭・小炭の調達、使用した砂鉄について概要を述べたい。

近藤家は、伯耆国日野郡根雨（現日野町根雨）を本拠地とした鉄山師で、最盛期では同時に12カ所の鑪および大鍛冶場を経営していた[註2]。近藤家の鑪経営は、安永８（1779）年、同郡山裏村（現日南町笠木）の谷中（たんなか）山に鑪・大鍛冶場を設置したのが始まりといわれ[註3]、天保14（1845）年、大坂に出店（支店）を開設したことで、経営を拡大させた。

開国後の安価な洋鉄の輸入や明治10年代半ばの全国的な不況の中、日野郡の鉄山師は次々と廃業に追い込まれたが、近藤家は明治21（1888）年、福岡山鉄鉱所を新設し、個人経営者では唯一汽鎚（蒸汽鎚＝スチームハンマー）を導入することで、経営危機からの脱却を図った。

近藤家文書は、元根雨高校校長の影山猛氏が長年にわたって整理を行い、近藤家の鑪製鉄の概要が明らかになった。これらの文書群は、平成12（2000）年に発生した鳥取県西部地震で近藤家の文書蔵が被災したのを機に、鳥取県立公文書館へ寄託された。当時専門研究員であった安藤文雄氏により、体系的な資料目録が作成され、文書の件数は約9,000件に上ることが確認された。

１．操業期間と場所

（１）操業期間

近藤家は、明治23（1890）年12月９日付で川平鉄山の製鉱場（鑪）の建築願〔**史料１**〕（明治23年「願伺届」、近藤家文書№2247―文書群は以下同じ）を、同24年４月には割鉄鍛冶場（大鍛冶場）の起業届〔**史料２**〕（明治24～25年「願伺届」№2262）を県知事宛にそれぞれ提出している。一方、川平鉄山の廃業は、日野郡役所に提出された届〔**史料３**〕（明治32～37年「願伺届」、№2246）によると、明治35年５月１日である。

川平鉄山の生産量などを記した「諸勘定控帳」（川平鉄山、№4030）によると、鑪や大鍛冶場で実際に操業が行われたのは明治34年10月までであり、明治35年は生産物（銑･鋼など）の出荷のみを行った。このことから、川平鉄山での操業は、明治24年４月から明治34年10月までの10年７ヶ月と判断される[註4]。

川平鉄山での操業に先立ち、近藤家は明治23年９月24日に久連村と17条から成る「村議定」を取り交わしている〔**史料４**〕。近藤家が久連村に鑪を設置した理由は、同地が日野川沿いで、近藤本店から約10kmの場所に位置し、「本村地内至便之地理」にあったためである。操業期間については「成可ク永遠ニ盛業致度事」として、期限を定めていない。通常、鑪の設置期間に関する村との取り決めは、生木の枯渇を想定した年限、または「年限生木有限」と記されることが多く、「永遠ニ盛業」との文言は異例といえる[註5]。

また、「諸勘定控帳」（前掲）には、舟越鉄山（野上村大字舟越村、1880～1891年）および城段鉄山（江尾村大字武庫村、1883～1891年）で生産された銑や、両鉄山で使用した大炭を川平鉄山へ搬入したことが記されている。

（２）場所

５代当主近藤喜八郎が自ら記した「諸日記」(註6)（明治23年、№3505）の明治23年９月27日の項には、喜八郎が「川平山鉄山場所見分ニ参ル」とあり、また「一、鑪ハ旧鑪床ニテ東向ニ打立申度　一、本古屋ハ南向ニ打立候様いたし度」との記述もみられる。鑪つまり高殿を東向に、本古屋（事務所）を南向きに建設する計画だったことがわかる。「旧鑪床」の記載は、近藤家による操業以前に別の経営者が鑪を操業していたことをうかがわせるが、詳細は不明である(註7)。

前掲〔**史料１**〕の明治23年12月９日付「製鉱場建築願」に添付された図の控えが下**図**である。「製鉱所」と「砂鉄置場」に加え、その北側には「溜池」が、東側には事務所（本古屋）がそれぞれ配置されている。同日付の「建物御届」から、製鉱所は江尾村大字久連字下池田477番にあり、その坪数は62坪５合、「鋼造小屋」も同番地で36坪の広さであったことがわかる。「諸日記」（明治24年、№3529）には３月６日付で「川平山立寄、初代之模様試査シテ、両村下江吹方ヲ示し合（後略）」とあり、製鉱所建築願提出の約３ヶ月後に試験的に鑪操業が行われたと考えられる。

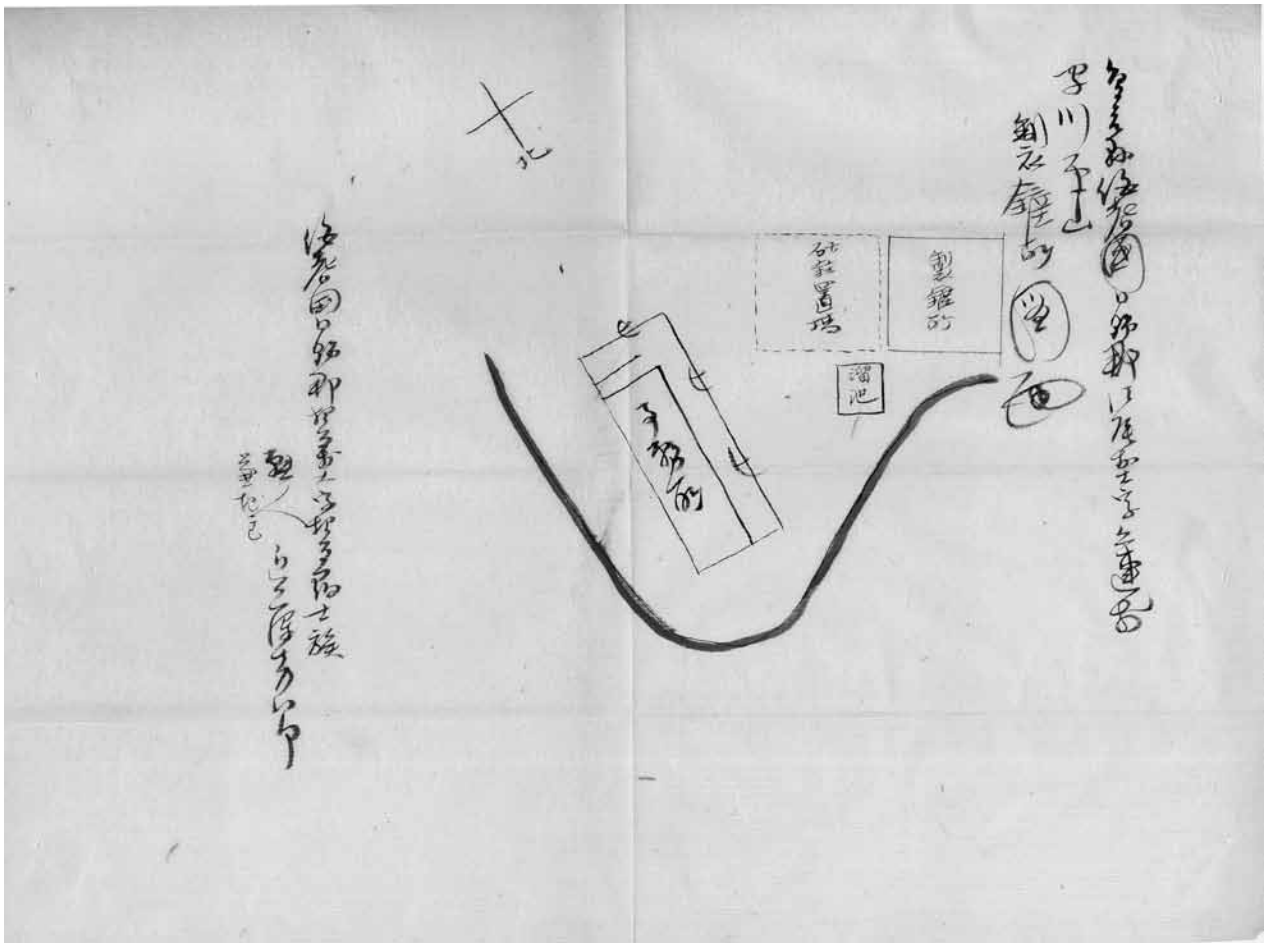


図　川平鉄山製鉱所図面（明治23年「願伺届」、№2247）

明治24年５月21日付の「建物御届」（明治24～25年「願伺届」、前掲）によると、大鍛冶場は製鉱所に程近い場所（地番未記載）に設置され、坪数は11坪６合５勺であった。また、明治25年５月27日付で日野郡長宛てに提出された「割鉄鍛冶起業届」（明治24～25年「願伺届」、前掲）では、「此度

今一ヶ所増設、来六月一日ゟ起業仕候」とあることから、大鍛冶場の増設があったことがわかる。「諸勘定控帳」（前掲）では、明治25年４月から大鍛冶場は「上鍛冶屋」「下鍛冶屋」の２軒体制で操業しており、この体制は、鍛冶場が操業を停止する明治34（1901）年10月まで続いた[註8]。

２．操業状況

（１）鑪による銑・鋼の生産量

「諸勘定控帳」（前掲）をもとに、**表１**は川平鉄山での鑪操業吹代数を、**表２**は川平鉄山の鑪生産物（銑・鋼）と製品（小割鉄・地物、鋼、為登銑など）をまとめたものである。**表１**によると、川平鉄山は、10年７ヶ月で約483代を操業し、うち鋼押しが247.67代、銑押しが235.33代であり、鋼押し・銑押しが同程度の割合で行われていたことになる。鋼押しと銑押しについて、春来尾は銑押し、秋来尾は鋼押しが主となる傾向にある。また、鋼押しについては、水鋼よりも火鋼の方が多い[註9]。**表２**から、川平鉄山で生産された銑の量は、明治30（1897）年が最高であり、その後は減少している。明治33年には、廃業した大西鉄山（板井原村）・土用鉄山（岡山県真島郡新庄村）から合計約１万貫の銑が川平鉄山へ運ばれ、小割鉄の原料となった。また、川平鉄山で生産された銑が福岡山鉄鉱所に運ばれ、錬鉄に加工された時期もあった[註10]。なお、川平鉄山で生産された銑の性質について、「諸日記」（明治31年、№3548）の明治31年12月７日付には「燐分少ナキ吉鑪下り銑、川平下り銑別ニ囲置候」と記載されており、吉鑪山（印賀村）とともに川平鉄山の銑は燐分が少量であったことがわかる[註11]。

表１ 鑪操業吹代数（単位：代）

明治			24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	合計
西暦			1891	1892	1893	1894	1895	1896	1897	1898	1899	1900	1901	
春来尾	鋼押	火鋼	6.00	19.00	—	6.00	—	9.00	—	12.00	3.00	—	13.50	83.50
		水鋼		—		5.00	3.00	1.00	6.00					
	銑押		7.00	9.88	24.00	15.25	19.75	19.75	21.75	13.50	16.50	16.25	10.19	173.82
	計		13.00	28.88	24.00	26.25	22.75	29.75	27.75	25.50	19.50	16.25	23.69	257.32
秋来尾	鋼押	火鋼	19.00	18.00	18.00	14.00	13.00	15.00	14.00	17.00	16.00	—	5.17	164.17
		水鋼		3.00		7.00	—	5.00	—					
	銑押		—	1.50	—	2.75	3.50	5.00	11.00	5.00	7.00	17.88	7.88	61.51
	計		19.00	22.50	18.00	23.75	16.50	25.00	25.00	22.00	23.00	17.88	13.05	225.68
各年合計			32.00	51.38	42.00	50.00	39.25	54.75	52.75	47.50	42,.50	34.13	36.74	483.00

鋼押し代数	25.00	40.00	18.00	32.00	16.00	30.00	20.00	29.00	19.00	—	18.67	247.67
銑押し代数	7.00	11.38	24.00	18.00	23.25	24.75	32.75	18.50	23.50	34.13	18.07	235.33

「諸勘定控帳」（近藤家文書№4030）を基に作成。

＊１：「諸勘定控帳」は、途中で操業を中止した場合は、1代に満たないものとして端数を計上している。
なお、小数第3位以下については、筆者が第3位を四捨五入して算出した。

＊２：明治24年は4月から12月まで、明治34年は1月から10月まで、その他の年は、1月から12月までの代数が記載されている。

（２）小割鉄・地物、鋼の生産量

川平鉄山では、小割鉄・地物、為登銑、鋼、鋼鉄が生産された。これらの製品は、米子で廻船業を営んでいた後藤彦三郎に引き渡され、大阪・東京・北陸地方へ出荷されたほか、玉鋼や鋼鉄は、海軍省にも納入された。

表２ 鑪生産物と製品一覧

生産／年	生産				製品					
	銑		鉧							
	銑合計＊1（貫）	うち川平山生産銑（貫）	鉧合計＊1（貫）	うち川平山生産鉧（貫）	小割鉄（束）	地物＊2（束）	為登銑＊3（束）	鋼＊4（束）	玉鋼（束）	鉧鉄（束）
明治24年4～12月	29,904.80	22,291.00	17,122.20	9,005.50	824	－	113	375	－	－
明治25年	45,725.90	34,857.95	28,085.08	16,111.00	1,679	－	284	674	177	－
明治26年	60,850.30	40,621.00	31,647.25	10,499.00	2,061	－	－	383	14	－
明治27年	53,655.38	38,303.00	39,593.13	12,319.50	2,051	464	111	713	－	－
明治28年	55,418.50	36,214.50	39,924.54	10,316.50	2,078	455	－	499	5	－
明治29年	58,603.40	46,063.00	34,399.12	16,799.00	2,305	677	－	630	22	－
明治30年	68,266.50	51,839.00	24,313.33	12,616.00	2,470	570	214	460	－	139
明治31年	73,701.60	47,584.50	21,381.06	12,141.50	2,373	342	－	361	128	268
明治32年	62,886.90	47,538.00	20,740.17	10,522.00	1,960	36	－	357	78	133
明治33年	80,959.50	48,641.50	25,033.18	4,878.00	2,532	706	100	190	56	27
明治34年	49,110.70	30,042.00	16,126.28	9,201.50	1,627	402	－	480	7	113
明治35年1～4月	542.30	－	5,891.18	－	－	185	－	－	－	－

「諸勘定控帳」（近藤家文書№4030）を基に作成。特に注記がない年は、1月から12月までの量を記載。

＊1：銑・鉧各合計は、生成銑・他山より受入れ・山内拾い銑・前年在庫の合計額。
＊2：地物は、明治27年4月に生産開始。
＊3：為登銑は、大阪へ出荷された銑。
＊4：頃鋼、砂味、切断品、折鋼なども含む。

（3）送風装置

明治28年の「諸日記」（№3550）には、川平鉄山にはトロンプと呼ばれる水力を用いた送風装置が登場する。近藤家が経営する鉄山では、明治24（1891）年から天秤鞴に替えてトロンプが順次導入された[註12]。

「諸日記」（明治28年、前掲）の明治28年11月１日には、「川平山謙治出浮、トロンフ（トロンプ―引用者）ニテ鍛冶屋鉄吹等不充分ニシテ、中止致し居候旨」[註13]とあり、この時期、川平鉄山の大鍛冶場でトロンプが試験的に使用されたことがわかる。その後、「諸勘定控帳」（前掲）に、明治31年６月から同32年にかけて、「トロンプ左下」という記述があることから、左下場の工程においてトロンプが使われていたことがわかる[註14]。

３．大炭・小炭

「諸勘定控帳」（前掲）によると、川平鉄山で使用された大炭は、主に川平山、大谷山、継岩山（久連村）、および近隣の大成山（庄村）･高谷山（武庫）･田代山（二部宿）の鉄山林から供給されていた。**表３**は、大炭の供給量を鉄山林ごとに示したものであり、継岩山が658,711貫、大谷山が532,483貫、大成山が330,875貫、川平山が205,431貫、田代山が153,214貫、高代山が109,953貫である。各所から川平鉄山へ供給される大炭の量は、操業最終年の明治34年を除き、毎年16万貫から20万貫程度であった。

また、大鍛冶場で使用された小炭の産地については、大炭と同様であり、明治24年から同34年までの操業期間を通じた総供給量は、大谷山約234石、継岩山約220石、大成山約200石、川平山約125石であった。

表３ 川平鉄山へ供給された大炭（単位：貫）

銑山林／年代	川平山	大谷山	継岩山	大成山	高谷山	田代山	その他＊1	合計
明治24年＊2	34,704.5	10,155.0	24,435.5	－	20,653.3	42,094.0	32,727.0	164,769.3
25年	421.0	－	75,117.0	－	43,528.0	54,412.5	719.0	174,197.5
26年	6,108.0	19,449.5	111,041.0	－	24,393.0	3,528.0	－	164,519.5
27年	331.5	6,773.5	183,728.0	－	21,378.5	－	－	212,211.5
28年	3,831.0	35,060.0	108,771.5	14,325.5	－	－	－	161,988.0
29年	6,704.0	97,508.5	97,459.5	25,465.5	－	－	－	227,137.5
30年	2,120.5	186,350.5	27,909.0	10,420.5	－	－	－	226,800.5
31年	13,456.0	144,923.0	16,341.0	42,453.5	－	－	－	217,173.5
32年	60,807.0	18,999.5	13,412.0	105,871.0	－	－	－	199,089.5
33年	44,370.0	5,698.5	496.0	90,062.5	－	20,478.5	－	161,105.5
34年	32,577.0	7,564.5	－	42,276.5	－	32,701.0	355.0	115,474.0
合計	205,430.5	532,482.5	658,710.5	330,875.0	109,952.8	153,214.0	33,801.0	2,024,466.3

「諸勘定控帳」（近藤家文書№4030）を基に作成。

＊1：その他の内訳は、明治24年は城段山・舟越山、洲河崎内林、買炭、同25年は三谷山、同34年は間地山中場とある。
＊2：明治24年は、4月から供給開始。

４．砂鉄

川平鉄山で使用された砂鉄は、「鉄山諸事控」（№3825）、「諸勘定控帳」（前掲）、「諸日記」（明治24～32年各年）によると、主として二部谷と俣野谷で採取された。二部谷の鉄穴場は、梅ノ木、北谷、勘部、山中、井谷、古市、継岩、大谷、和正谷、樋ヶ谷である。山中鉄穴は「アコメ」が採取され、それ以外は「真砂」であった。俣野谷の鉄穴場は、篠谷、岩谷、池田、福島であるが、砂鉄の種類は不明である。

明治26（1893）年８月、近藤家が経営する鉄山の村下が一堂に会し、各鉄山の操業について議論がなされた。その様子が記された「鉄山諸事控」（前掲）によると、川平鉄山は明治26年当時、鋼押しが思うようにいかず、折地（鋼）の生産も少量であったという。その原因として、良質の砂鉄の不足による砂鉄の調合の不具合にあると考えられていた[註15]。

なお、「諸日記」（明治31年、前掲）によると、明治31年12月頃には、神戸上（現日南町）や皆池（皆生、現米子市）の砂鉄を使用したとの記載があり、砂鉄の配合について様々な試みがなされたと推測される。

おわりに

前述のとおり、川平鉄山は明治35（1902）年５月に廃業するが、近藤家による鑪製鉄はその後も継続した。海軍省からの庖丁鉄や鋼の受注により、日露戦争期に生産量がピークを迎えたが、明治40年以降は海軍の方針転換もあり、受注が激減した。これにより、近藤家では鑪の存廃を検討するようになり、徐々にクロム鉱石や木炭の生産および販売に事業を転換していった。そして、大正10（1921）年、近藤家は当時経営していたすべての鑪を閉鎖し、140年余り続いた鑪製鉄は終焉を迎えた。なお、川平鉄山には大正11年、近藤家によって製炭所が置かれ、昭和４（1929）年まで存続した。

〔付記〕

近藤家文書の利用には、近藤登志夫氏のご高配を賜りました。安藤文雄氏には、同家文書の整理に携わる機会を賜りました。また、本稿の作成にあたって、伊藤康氏、角田徳幸氏にご指導いただきました。記して感謝申し上げます。

註

（1）本報告書に合わせて、本稿では鑪・大鍛冶場を備えた施設を「川平鉄山」と称し、大炭・小炭を供給した鉄山林としての「川平山」と区別している。

（2）近藤家が経営していた「鑪および鍛冶場」は、①鑪と大鍛冶場が併設されたもの、②大鍛冶場が単独で設置されたものの２種類に分けられる。12ヶ所は、①と②の合計であり、近藤家文書の「諸勘定控帳」（銑･鋼･細鉄･小割の生産、大炭・小炭・砂鉄・米などの調達量が示された帳簿）の各鑪・大鍛冶場をもとに筆者が算出したもので、明治22（1889）年の経営箇所数である。

（3）ただし、安永８年の鑪開業当初の史料は、管見の限り見当たらない。明治40年４月、近藤家５代当主喜八郎が日野郡役所へ提出した「安永八年鉄業開始以来現今ノ処迄本業ノ進度製造高取調書入郡役所へ差出タルモノ」（近藤家文書№2617）による。

（4）川平鉄山の操業期間について、『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』（鳥取県教育委員会埋蔵文化センター、1984年）は「大正年間に操業を停止」（p.69）とし、影山猛は、明治22年から同33年としている。

（5）村議定の研究は、加地至「19世紀伯耆日野郡の村議定にみるたたら製鉄の社会集団」（『中国四国歴史学地理学協会年報』第10号、2014年）に詳しい。

（6）「諸日記」は、近藤喜八郎によるものと、近藤本店の手代と思われる数名によって書かれたものの２種類が存在する。本稿の「諸日記」は前者である。

（7）なお、影山猛は「近藤家文書による鉄山」（『伯耆文化研究』７、2005年）において、川平鉄山の操業期間は、文化13（1816）年から文政４（1821）年で、鉄山師は松田屋馬吉（根雨・手嶋家）であったとしている。

（8）鍛冶場の名称は時代によって変化する。明治26（1893）年10月から「上鍛冶屋」･「西鍛冶屋」に、同27年１月から「西鍛冶屋」･「東鍛冶屋」になり、同29年１月から「上鍛冶屋」･「中鍛冶屋」になった（「諸勘定控帳」川平鉄山、№4030）。

（9）明治24,26,31,32,34年は、火鋼・水鋼の内訳が不明であるが、「諸勘定控帳」（川平鉄山、前掲）に記載された鋼の出荷をみると、火鋼のほうが多い。

（10）川平鉄山から福岡山鉄鉱所へ運ばれた銑は、明治25,26,28,29,32～34年の合計で、42,158貫であり、最も多かったのは、明治34年の16,062貫である。

（11）明治30年代、海軍省は錬鉄・鋼における燐分含有量の基準を厳格化した。基準に満たない錬鉄・鋼は廃棄処分にされるため、近藤家では、錬鉄の原料となる銑、鋼の品質保持に努めた。

（12）近藤寿一郎『日野郡に於ける砂鉄精錬業一班』（似玉堂、1926年）

（13）「川平山謙治」とは、武信謙治を指す。安政６（1859）年会見郡三崎村（現南部町）の生まれで、明治18年近藤家が経営する城段鉄山の手代になった。城段鉄山廃業後の明治24年、大西鉄山の手代を勤め、明治28年頃から川平鉄山の手代に名前がみられる（明治28年「諸日記」、№3550）。

（14）「諸勘定控帳」（川平鉄山、前掲）によると、「トロンプ左下」によって、明治31年６,７,12月に計360貫、明治32年は計620貫の小割鉄が生産されていた。

（15）川平鉄山の鋼押し不調について、「鉄山諸事控」（№3825）には以下のように記述されている。

「当山（川平鉄山―引用者）如キハ、真砂鉄穴二部谷ニ御座候得共、砂鉄モ無数前条申述候通り、砂鉄ノ調合モ不充分よりシて、銑・鋼押共小湧充分勝利ト申候義無之乎ト愚考仕候、依テ砂鉄ニ注意致度（後略）」

捨ス可シ、亦耕地等ヲ相係ルトキハ其所有人ヲ示談之上、相当之料金ヲ相定メ、差間不相成様可致事

第五條

一大炭・小炭焼入直段并ニ砂鉄売買直段之義ハ、世上之成行ヲ以テ相互不都合無之様取定メ候事

第六條

一他郡村ヨリ木炭・砂鉄購求スル否ハ、営業人之随意トシ、是ヲ運搬等ハ村方ニ於テモ可成尽力之偏ニ物産盛殖スルヲ目的トス

第七條

一営業人之所有山林及買受山林之樹木ヲ村方ヨリ大炭・小炭ニ焼入ヲ為ントスルトキハ相当伐代金ヲ可相定メ事

第八條

一元釜土及鉱業使用之泥土ハ入用次第堀（ママ：掘）取候事

但、人民持山林内ヨリ堀（ママ：掘）取候トキハ相当之料ヲ出ス事

第九條

一製鉱営業所用水之義ハ無差間、最寄流出水ヲ相用ヒ候事

但、在来耕地之用水ニシテ、若シ流水不残、該営業所ヱ使用能ハザルモノハ、双方立会分水或ハ相当之処分ヲ為ス可シ

第拾條

一右稼場之為メ、車道或ハ橋船渡場改修スルニ当リ、村内耕地及山林・原野共相当代価ヲ以テ、購求スルカ亦ハ至当之宛口米ニテ借入、廃業之後在来之如ク修繕之上、返戻可致ニ付、其節ニ至リ、村内所有者ニ於テ更ニ苦情無之事

第拾壱條

一諸荷物運搬木炭焼入之義、精々村方ヨリ可取計モ到底行届キ難ク見込ニ付、他郡村ヨリ従事スル或ハ営業所手許ヱ車馬準備スル等随意タルベシ

但シ、自他之稼込人少クシテ営業差間候トキハ、村方ニ於テ飽迄尽力シ、稼入可申事

第拾弐條

一下モ壌之義ハ、山内必用之外ハ一切村方ヱ相与ユル事

但シ、雪隠ハ村方ヨリ建築之衛生之害非ル様清潔ニスル事

第拾参條

一在来之村方人民モ鉄山人民モ等シク同村居民ニツキ、別テ入魂ニ致合相共ニ本村之規約ヲ相守可申、若シ何れ之間ニ不平ヲ生スル事有ルモ、双方頭分ヨリ不都合無之様和合可取計事

第拾四條

一職場内ハ素ヨリ、釜山等ヨリ失火候節ハ、山内人民ハ素ヨリ村方ヨリ馳付、消防可致ハ勿論、若シ村方ニ失火スルトキハ亦同シ

第拾五條

一本村内ニ於テ鉄鉱発見スルトキハ其筋之認可ヲ得テ、誰彼所有ヲ不問営業人ヨリ開業可致、損地料等之事ハ第弐条及第拾条之例ニ拠ル

第拾六條

一本村内山林・樹木ハ鉄山営業人之望ニ任セ、販売可致、無断他方ヱ売却セサル事

第拾七条

一諸工夫ノ内、死亡セシトキハ第壱種字下モ池田墓地ヱ埋葬スベシ

右之條々、鉄鉱製造人ト村方一流（ママ：統）協議之上訂約候処、確実也、然ル上ハ稼中相互誠直ヲ専ラトシ、其義務ヲ可果、若シ議定洩之件モ有之候時ハ、不都合無之様尚取極メ可申、為後念為取換訂約証書如件

明治弐拾参年九月廿四日

日野郡根雨村大字根雨宿

鉄鉱製造人

近藤　喜八郎　（印）

同郡江尾村大字久連村

人民総代

（五名人名略）

区長（人名略）

翻刻史料

〔凡例〕
・句読点は、翻刻者が適宜付した。
・（　）は、翻刻者が付した。

史料1　明治二十三年「願伺届」
（近藤家文書No.　二二四七）

製鉱場建築願

私義伯耆国日野郡江尾村大字久連村地内字川平山ニ於テ砂鉄購求製鉱致度、私所有地別紙図面ノ場所ニ於テ製鉱被差許度、坑山外ニ付、此段奉願候也

明治廿三年十二月九日

伯耆国日野郡根雨村大字根雨宿廿一番屋敷
士族　近藤喜八郎

（朱筆）「廿三年十二月十五日付ヲ以聞届ケニナル」

鳥取県知事　武井守正殿

史料2　明治二十四～二十五年「願伺届」
（近藤家文書No.　二二六二）

割鉄鍛冶起業御届

伯耆国日野郡根雨村大字久連村地内字川平山

一割鉄鍛冶場　壱ヶ所

〆

右ハ割鉄鍛冶場本月二十日より起業仕候間、明治二十年本県令第百五十八号ニ拠り、此如及御届候也

明治廿四年四月十日

日野郡根雨村大字根雨宿弐十一番地
近藤　喜八郎

鳥取県日野郡長　小山光正殿

史料3　明治三十二～三十七年「願伺届」
（近藤家文書No.　二二四六）

廃業届

日野郡江尾村大字久連村地内
川平山

一砂鉄製鉱所　壱ヶ所

右ハ明治弐拾参年十二月許可ヲ得、営業罷在候所、本年四月限り全部廃業仕候間、此段及御届候也

明治三十五年五月一日

鳥取県日野郡根雨村大字根雨宿弐拾壱番地
近藤　喜八郎

鳥取県知事　寺田祐之殿

史料4　明治二十三年〔袋〕「久連村鉄山所生木買取書并ニ村議定書其外書類入」
（近藤家文書No.　一七六二）

為取換議定書

一日野郡江尾村大字久連村地内ヱ這回鉄鉱所ヲ設置シ、殖産行業ヲ開発セント欲シ、其営業人ト村方人民之間ニ於テ訂約ヲ為ス左之如シ

第壱條

一営業人近藤喜八郎ハ、本村地内至便之地理ヲ認定シ、鑪・鍛冶屋之職場及諸工夫之居住所建設スル事

第弐條

一右敷地之義、田畑ナレバ在来之宛口米ヲ以テ相定メ、山林ナレバ衆人之興（ママ、與）論ヲ以テ相当之料金ヲ定メ、原野ナレバ無料トシテ右各自所有人ヨリ無異変稼人ヱ貸与シ、地目変換等其手続ヲ為スモノトス

第参條

一右製造年間ハ成可ク永遠ニ盛業致度事

第四條

一職場残雑取捨所之義、河川・原野ハ稼人之適宜棄

第５章　総括

今回の調査は、砂防工事中に伴う緊急的な調査であったことや、発掘調査対象地が砂鉄洗い場の一部の限られた範囲であったことから、川平鉄山の全貌を調査することは出来ませんでした。しかし、これまであまり知られていなかった川平鉄山の概観を知ることが出来たものと考えます。

発掘調査では出土遺物が少なく、遺構の明確な時期が確定できなかったが、検出された磁器の内１点が明治期のもので、他は18世紀末から19世紀中葉のものと考えられた。川平鉄山の操業時期は明治23～34年との記録があるので、御酒徳利等の古手の磁器は伝製品として使用されたものと考えられます。廃業の時期が明治34年頃とされるため、今回の調査面は川平鉄山の最終時期の遺構面であり、概ね明治34年頃の遺構面と考えられます。これ以前の様相は不明である。

調査の対象となった川平鉄山の施設は、砂鉄洗い場とその上段平場の一部でした。造成地業の様子や埋没した崩壊石垣から推察すると、高殿を中心に操業を繰り返し、大量の鉄滓を周辺に廃棄しながら、鉄山を拡張し整備して行った姿が見えて来ます。

また、川側石垣の石積みは数か所で石の積みの違いが観察され、何回かの補修や積み足して整備されていることが分かりました。

砂鉄洗い場の上に造られた上段平場ですが、基底部に大型の石を置き、砂鉄洗い場の山側を画するように造成されていました。平場南側の川に面した場所で小屋基礎の石列が検出されており、何らかの作業小屋が置かれていたと考えられます。上段平場の山斜面側に水路跡が観察されており「水車小屋」の可能性も考えられます。また、平場から石組遺構が２基検出されており、岡山県大成山たたら遺跡群Ｂ区の砂鉄洗い場から検出されている石組遺構と類似していた。石組底面に炭の層があること、石が被熱を受け赤化していることなども共通していました。大成山たたらの報告では「この遺構は、砂鉄洗い場を構成する一遺構であると推察される。しかし、砂鉄洗い場での火の使用については文献等に見られないため、どのような性格をもっていたのか不明である」とされている。本遺跡の石組遺構も同様であると言わざるを得ないものである。

砂鉄洗い場は、川側の平坦面の一部を調査しただけで、砂鉄洗舟等の遺構は検出されなかったが調査区外の高殿側に水路跡と窪地が観察されるため、その場所に残存していると考えられます。地業観察トレンチでは、地山に沿って崩壊した埋没石垣が確認されており、当初の砂鉄洗い場の範囲を示していた。そのため造成時期は不明であるがが、ある時期に拡長して造られていることが土層から判明しました。拡張造成土層中には大量の鉄滓が含まれており、たたら製鉄で大量の廃滓が出ていたことを物語っていました。

本報告では、「たたら研究会」の池本美緒氏に、鳥取県公文書館所蔵の近藤家文書の川平鉄山の操業データを整理いただき、その成果を寄稿いただきました。川平鉄山の操業の様子を伺い知る貴重な報告となったと考えます。また、発掘調査で出土した以外の羽口や炉壁などのたたら関係遺物は、地権者の岡本隆雄氏が表採されていたものを提供していただきました。記して感謝申し上げます。

現在、日野郡の「たたら遺跡」は、地域の特色のある歴史・産業遺産として注目され、地域活性化の資産として活用が図られているところです。今回の発掘調査の成果が、この日野郡地域の「たたら」の歴史的な資料として、少しでも活用していただければ幸いです。

写 真 図 版

川平鉄山元小屋建物写真（年代不明）米子市立図書館蔵

高殿跡

大鍛冶場跡

鉄池跡

砂鉄洗い場跡

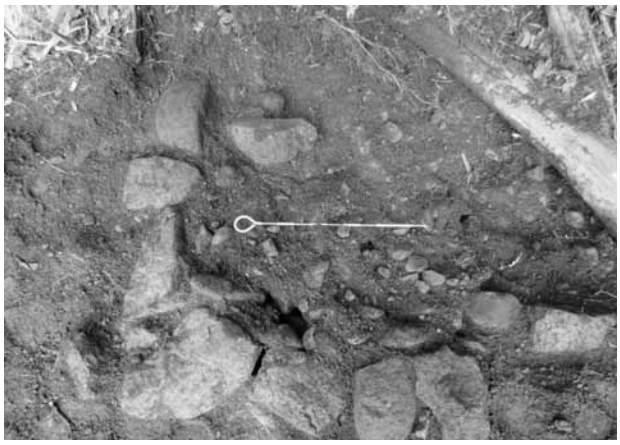
岡本宅に残る元小屋

金屋子社跡

図版２

上段平場（Ａ１区調査後）

上段平場（確認状況）



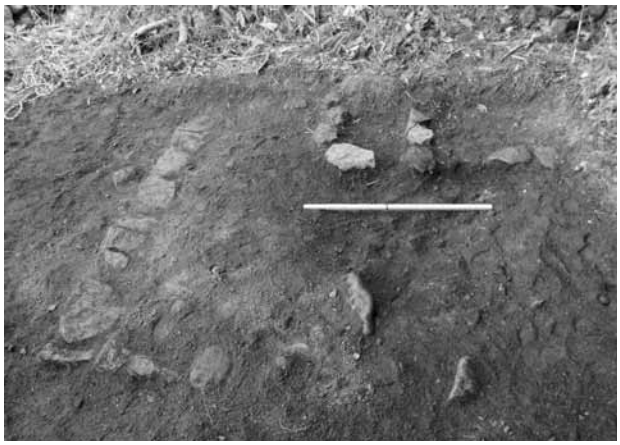
石組１（確認状況）

石組１（遺物検出状況）

石組１（検出状況）

石組２（確認状況）

石組２（検出状況）



小屋基礎石列（検出状況）

小屋基礎石列内鎌出土状況

上段平場造成地業Ｔ１断面

上段平場（Ａ１区遺物出土状況）

図版４

上段平場石垣状況

Ａ２～４区調査前（Ａ４区から）

Ａ２～４区調査後（Ａ４区から）

Ａ２～７区調査前（Ａ１区から）

Ａ４～７区調査後（Ａ４区から）

石列２（検出状況）

Ａ４区の大型石

トレンチ２断面

トレンチ２埋没石垣状況

トレンチ３断面

トレンチ３埋没石状況

図版６

トレンチ４断面

トレンチ４埋没状況（石垣なし）

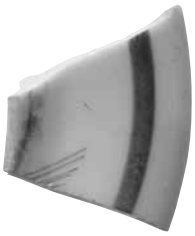
Ａ５区石積土手（上面）

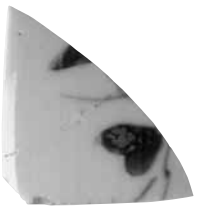
Ａ５区石積土手（西側側面）

石列３（Ａ３区中程～Ａ４杭～Ａ５杭へ）

1

2


3


4

6

5

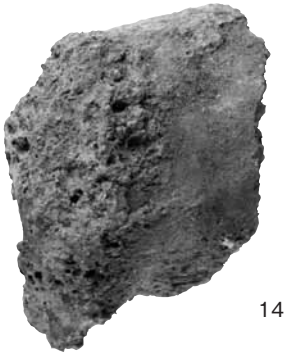
7

8

9

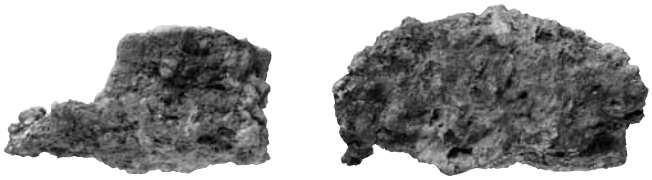
10

11

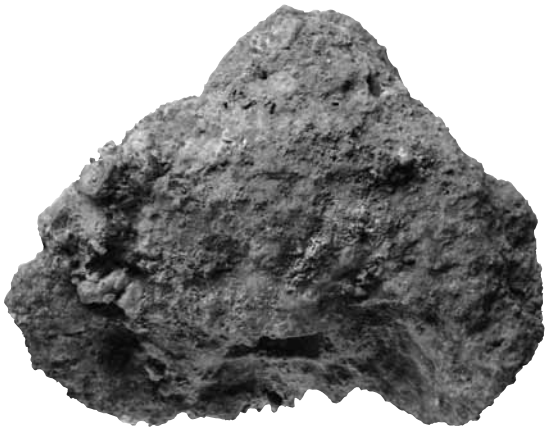

14

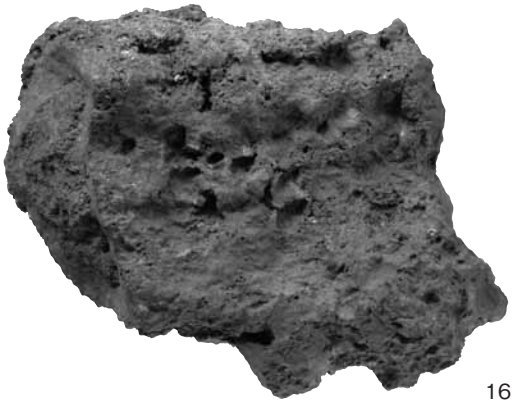
15

図版８



12





16

13

17

19 石組１出土炭

18

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわひらてつざんあと
書　　名	川平鉄山跡
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	9
編著者名	小原貴樹
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室
所　在　地	〒683-0011　鳥取県米子市福市281番地　　ＴＥＬ・ＦＡＸ　0859－26－0455 ｅメールアドレス　yonagomaibun@clear. ocn. ne. jp
発行年月日	西暦２０１６年（平成２８年）３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川平鉄山跡	鳥取県日野郡 江府町久連	31403	135	35度 18分 9秒	133度 28分 5秒	2014年10月28日 ～ 2014年11月30日	387㎡	砂防工事

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川平鉄山跡	生産地	明　　治	石組土坑、小屋基礎石列、 石列、石垣、石積土手	陶磁器、鉄鎌、鉄滓、羽口	

要　　約

川平鉄山跡は、鳥取県日野郡内に残るたたら製鉄遺跡で、砂防工事にかかる一部の遺構の発掘調査の成果を報告するものである。川平鉄山の操業者は明治時代に根雨の鉄山師近藤家であり、日本の伝統的なたたら製鉄法によって営まれた鉄山である。

発掘調査では鉄山の砂鉄洗い場の一部を発掘し、平場や石垣、石組土坑や小屋基礎石列等を検出した。鉄山は埋没した石垣等の発見により、操業で排出した鉄滓で平場を拡張しており、調査面は明治34年の廃業時の姿であることが確認された。

川平鉄山跡は、日野郡内に残された地域の特色ある産業遺産として大切な遺跡である。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書９
鳥取県日野郡江府町
川平鉄山跡
２０１６年3月
編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団
〒６８３－００１１　鳥取県米子市福市２８１番地
ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５
印　　刷　有限会社米子プリント社